

ヨハネ福音書における 神殿モチーフとその意味

三浦 望

I 序

英米圏のヨハネ福音書研究に関しては、1980年代後半以降、多様な方法論が乱立・併存しているのが現状であるが、こうした状況の中、ひとつの傾向として、第二神殿時代後期（ギリシア・ローマ時代）のユダヤ教的な背景を福音書テキストの中に読み取ることが1990年頃から盛んになっている。これは、ユダヤ学と新約聖書学のボーダーレス化が進む中で、ヨハネ福音書の背景がユダヤ教的なものであることが（少なくとも英米圏の）研究者間での同意事項とされ、ヘブライ語聖書およびユダヤ教第二神殿時代後期の諸文書の中にヨハネ福音書を位置づけ比較・理解することがある程度一般的となった事情を反映しているようである。ヨハネ福音書は、共観福音書と同じようにヘブライ語聖書の伝統（伝承）の中に違和感なく位置づけられ、当時のユダヤ教が前提としていた諸々の事柄を同じく前提としていることが確認されている。

近年、ヨハネ福音書の「神殿」モチーフ、もしくはそれに基づいたキリスト論（神殿キリスト論 Temple Christology）を考察した研究が比較的多く刊行されている¹⁾。これはユダヤ教的な背景（特に祭や神殿祭儀との関連）において、ヨハネ福音書で使用されているメタファーやモチーフを読みとろうとする動きである。そこで以下では、ヨハネ福音書における神殿モチーフを取り扱い、この福音書が前提としているヘブライ語聖書の背景を「間テキスト性（intertextuality）」から考察し、ヨハネ福音書内における神殿モ

ティーフの構成上の位置づけ（「内テキスト性、intratextuality」）、およびその神学的意味を問う²⁾。

II 神殿モティーフ³⁾

ヨハネ福音書における「神殿」に関連する用語

まず、ヨハネ福音書において使用される「神殿」に関連する用語を確認したい（下記の図参照）。日本語訳聖書で「神殿」と訳出されているギリシア語には二種類ある（τό ἱερόν および ὁ ναός）。また、「神殿」という意味で使用される「家」（ὁ οἶκος および ἡ οἰκία）、さらに「場所」（ὁ τόπος）も神殿に関連する語として挙げることができよう。「幕屋」（ἡ σκηνή / τό σκηνός）も当然、神殿に関する用語であるが、ヨハネ福音書では、この名詞の使用例はなく、「幕屋を張る」（σκηνόω）という動詞が序文（ヨハ 1:14）で用いられている。

- * 「神殿（境内）」（庭や境内を含んだ「神殿」の聖域全体）（τό ἱερόν）：
ヨハ 2:14, 15; 5:14; 7:14, 28; 8: (2), 20, 59; 10:23; 11:56; 18:2
- * 「神殿」（「至聖所」[τὰ ἅγια τῶν ἁγίων] を含む聖所 [τά ἅγια]、内陣／拜殿 [ὁ ναός] 特に建物を指す）：ヨハ 2:19, 20, 21
Cf. LXX にて「至聖所」はこの語も使用する。
- * 「家」（ὁ οἶκος）：ヨハ 2:16 (duo), 17; (7:53; 11:20)
Cf. ὁ οἶκος τοῦ θεοῦ 「神の家」 = 神殿
- * 「家」（ἡ οἰκία）：ヨハ (4:53); 8:35; (11:31); 12:3; 14:2
※アッティカ方言のギリシア語（Attica Greek）では、ὁ οἶκος は「財産」、ἡ οἰκία は「住居」の区別があったが、新約文書ではいずれも「家／家族」。
- * 「場所」（ὁ τόπος）：ヨハ 4:20; 11:48; 14:2, 3

以上を踏まえた上で、本論文で取り上げる箇所は、下記の通りである。

- ヨハ 1:14 ヨハネ序文
- ヨハ 1:29, 36 「神の子羊」
- ヨハ 2:1-11 カナの婚礼における「しるし」
- ヨハ 2:13-22 神殿肅清
- ヨハ 4:1-49 サマリアの女性との対話
- ① ヨハ 5:1-47、② ヨハ 7:1-8:59、③ ヨハ 10:22-39 イエスと敵対者たちとの論争の場としての「神殿」・祭
- ヨハ 11:45-57 イエスの敵対者がイエス殺害を企む場としての「神殿」
- ヨハ 12:12-19 エルサレム入城
- ヨハ 19 十字架上の死
- ヨハ 2:16; 8:35; 14:2 「父の家」

II-1. ヨハ 1:14 ヨハネ序文

「ことばは肉となって、われわれの間に幕屋を張った。——われわれは彼の栄光を、父から遣わされた独り子の栄光を見た——
〔彼は〕 恵みと真理に満ちて〔いた〕。」(1:14)

Καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο καὶ ἐσκήνωσεν ἐν ἡμῖν, καὶ ἐθεασάμεθα τὴν δόξαν αὐτοῦ, δόξαν ὡς μονογενοῦς παρὰ πατρός, πλήρης χάριτος καὶ ἀληθείας.

ヨハネ福音書序文で、神殿モチーフは「幕屋を張った」(ἐσκήνωσεν < σκηνώω; Cf. ἡ σκηνή / τό σκηνός) という語において明確に表現されている。ヨハネ福音全体に対して、序文が持つ解釈上の重要性を考慮すると、序文の中で既に神殿モチーフが使用され、しかもこれによってこの世におけるキリストの在り様を描写していることは大きな意味を持つ⁴⁾。

「幕屋」(ἡ σκηνή) とは、出エジプト記において、シナイ山から神殿建設までの間、YHWH の仮の宿りとされた「荒れ野の幕屋」のことを指すが、

これは神が民の間に住まうために (Cf. 出 29:46)⁵⁾、モーセに命じて人々に造らせた「聖なる場所」であり、これによって、YHWH は人々のうちに臨在する (出 25:8)⁶⁾。また、この幕屋 (もしくは神殿) には「主の栄光 (δόξα) が満ちていた」と表現される (Cf. 出 25:8; 40:34, 35 「主の栄光が幕屋に満ちていた…… (δόξης κυρίου ἐπλήσθη ἡ σκηνή)」; 33:22; 40:34-38; 王上 8:11; エゼ 43:5; 44:4)⁷⁾。これは、ヨハネ序文の 1:14b 「われわれは彼の栄光を、父から遣わされた独り子の栄光を見た」に並行する内容となっている。また、ヨハ 1:14b は、幕屋として世にあらわれたイエスにおける神の栄光——それが福音書の中で展開されるのだが——を表現していると言えよう。

人々の間に住まい臨在する神は、預言書においても、終末における神の到来を意味するイメージとして語られるようになった (Cf. ゼカ 2:14, 15; エゼ 37:26-28)⁸⁾。また、序文における「言葉」(ὁ λόγος) が、知恵文学における「人格化された知恵」を背景とした「ロゴス=キリスト」であることはよく知られているが⁹⁾、シラ書においては、この人格化された知恵が幕屋、そして律法 (トーラー) と同定されている (Cf. シラ 24:8-10)¹⁰⁾。

ヨハネ福音書の「派遣神学」において、人の子 (ロゴス) イエスは、天 (父のふところ) から地上に来て、信じる者たちを「罪」¹¹⁾ の「世」¹²⁾ から救う。地上に現れた啓示者イエスと、彼を通して現わされた神の栄光 (啓示) が、この幕屋のイメージの中に表現されている。すなわち、ロゴス=キリストは人々のうちに住まう「神の幕屋」であり、またそこにおいて「神の栄光」(啓示) が現わされる場——神の栄光を (信仰の目で) 見えるかたちで現わした者 (啓示者) ——として描かれている。ユダヤ教における神殿の発展史を考慮するならば、「幕屋」を広い意味でひとつの神殿モチーフとして理解することは可能である。既に、福音書冒頭の序文において神殿モチーフが表れていることは、福音書全体の中に、イエスが神殿であり、神の啓示の場 (人格) であるというモチーフが重要な機能を持っていることを意味すると考えられる。

II-2. ヨハ 1:29, 36 「神の子羊」

「その翌日、彼（洗礼者ヨハネ）はイエスが自分の方へ来るのを目にして言う、『見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ。』」（1:29）

Τῆ ἐπαύριον βλέπει τὸν Ἰησοῦν ἐρχόμενον πρὸς αὐτὸν καὶ λέγει, Ἴδε ὁ ἀμνὸς τοῦ θεοῦ ὁ αἴρων τὴν ἁμαρτίαν τοῦ κόσμου.

…

「その翌日、ヨハネはまたその弟子たち二人と立っていた。そして歩いて行くイエスに目を注いで言う、『見よ、神の子羊だ。』」（1:35-36）

Τῆ ἐπαύριον πάλιν εἰστήκει ὁ Ἰωάννης καὶ ἐκ τῶν μαθητῶν αὐτοῦ δύο καὶ ἐμβλέψας τῷ Ἰησοῦ περιπατοῦντι λέγει, Ἴδε ὁ ἀμνὸς τοῦ θεοῦ.

洗礼者ヨハネによるイエスのこの呼称は、神殿祭儀における犠牲獣としての羊を意味しており、明らかにこれも神殿モチーフのひとつである。しかしながら、この謎多き「神の子羊」（ὁ ἀμνὸς τοῦ θεοῦ）という表現の解釈に関しては、長年多くの議論が重ねられているが決定的な定説がなく、いくつかの解釈に分かれている。以下は、代表的な5つの解釈である¹³⁾。

(1) イザヤ書 53 章における、人々の罪をその身に受ける「主の僕」の表象としての「子羊」：¹⁴⁾

イザ 53:7-8 の「屠り場に引かれる子羊のように、毛を切る者の前で物を言わない羊のように……」（ὡς πρόβατον ἐπὶ σφαγὴν ἤχθη καὶ ὡς ἀμνὸς ἐναντίον τοῦ κείροντος αὐτὸν ἄφωνος）においては、「子羊」（πρόβατον）と「羊」（ἀμνός）が交換可能な語句として並置されており、また、イザ 53:10-11「主は苦しみで彼を清めることを望み、……彼は彼らの罪を自ら負った」（私訳）（κύριος βούλεται καθάρσαι αὐτὸν τῆς πληγῆς· …καὶ τὰς ἁμαρτίας αὐτῶν αὐτὸς ἀνοίσει）では、この羊で表象される「主の僕」が

人々の罪（苦しみ）を代わりに負うことが明確に示されている。語句の違い（*πρόβατον* と *ἀμνός*）があるとしても、「羊」という表象および「罪を取り除く」という機能において、これが最も蓋然性の高い解釈とされており、多くの研究者の支持を得ている¹⁵⁾。

(2) 出エジプト記 12 章における「(主の) 過越の羊」:¹⁶⁾

出エジプト記における「過越の羊」とは、イスラエルの民が災いを「過ぎ越す」ために家の鴨居にその血を塗った羊である（出 12:21-27）¹⁷⁾。この記述の中では、「ひと束のヒソブ」（出 12:22）を血が入っている鉢の中に浸すことが言われているが、ヨハネ福音書の受難記事においても同じ「ヒソブ」への言及がなされている（ヨハ 19:29）¹⁸⁾。しかも、受難記事におけるヒソブ¹⁹⁾への言及はヨハネ福音書に特有の記述である（ヨハ 19:29// 出 12:22 の「ヒソブ」の共通性）。さらに、ヨハ 19:36 は²⁰⁾、紛れもなく出 12:46 (LXX)（「また、その骨が打ち砕かれることはないであろう [καὶ ὀστοῦν οὐ συντρίψετε ἀπ' αὐτοῦ]」）の引用である。したがって、こうした関連性からこの解釈は説得力を持つのであるが、「主の過越の羊（*πρόβατον*）」は「罪の贖いの犠牲」ではないので、「世の罪を取り除く」（ための犠牲）として見做すことが困難となる。また、過越の羊は、*πρόβατον* であって *ἀμνός* ではない。（ただし、前述のようにイザ 53:7 では並行して使用されている。）しかし、イエスの死を「過越の羊」と見做す伝承（出 12 章）と、「罪の贖いの犠牲」（世の罪を取り除くための犠牲の死 // レビ 4 章、16 章、後述の(3)における）の意味が混合（conflate）された可能性は高く、実際、その可能性を示すのが、ヨハ 4:6 の「第六刻頃」である。第六刻（正午頃）とは、再びヨハ 19:14 で言及されるが、それは過越祭の準備の日に過越の羊が神殿において屠殺される時刻である。また、ヨハネ福音書以外でも、そのような混合の可能性を示す箇所はいくつか見られる（I コリ 5:7; I ペト 1:18-19）²¹⁾。

(3) レビ記 4、16 章における「贖罪の献げもの（犠牲）」:

贖罪の献げもの（犠牲獣）としての若い雄牛については、レビ記 4 章、16 章にて言及されている（レビ 4:1ff; 1:20-22）²²⁾。「世の罪を取り除く」とい

うことでは、「贖罪の献げもの」（犠牲）としての解釈はありうるが、「贖罪の献げもの」は牛、贖罪日の「贖罪の献げもの」も牛か山羊であるため、「子羊」という表象とうまく合わないという難点がある。

(4) 黙示的な羊 (apocalyptic lamb) :²³⁾

「十二族長の遺訓」に登場するメシア的・黙示的な羊（ヨセフ遺 19:1-12、レビ遺 18:2-9）。「子羊」が既にユダヤ教の中で「メシア的存在」として理解されていたとする説（エチオピア語エノク書＝Iエノ 89）もあるが、これは根拠が薄い²⁴⁾。確かに、ヨセフ遺 19 やレビ遺 18（遺訓）は、ヨハネ福音書と共通のモチーフを提示するが、これらがキリスト教徒による後代の挿入部分である可能性も否定できない。

(5) 創世記 22 章における「イサクの犠牲」の象徴 (Akedah typology) :²⁵⁾
「独り子」としてのイエス（ヨハ 1:14; 3:16, 18//1:34）とアブラハムの独り子イサクとの比較から、この呼称がアブラハムによるイサクの奉献（犠牲）（創 22:1ff）と同じように、父である YHWH がその独り子イエスを犠牲とするアケダー予型論であるとする説。

上記の諸説は、どれもその解釈上の可能性を否定できないが、おそらくひとつの解釈だけに限定することができない。「神の子羊」とは、複数の表象を混合し、多重的な意味を含蓄していると考えられる。その場合、主に(1)～(3)の表象としての「子羊／過越の羊」や「罪を取り除く犠牲」などの表象が混合され、複合的に使用されている可能性が高いと思われる。いずれにしても神殿（祭儀）に関連するモチーフとして語られており、しかもイエス＝「贖罪」（罪を贖う expiatory）の犠牲（死 vicarious death）が示唆されていると言える（この点については、後述の 11:45-57 の議論を参照のこと）。ヨハネ福音書において、過越祭は三度描写され（すなわち、①ヨハ 2:13, 23、② 6:4、③ 11:55; 13:1; 19:31; 20:1）、イエスは三度目の過越祭において死ぬ。共観福音書においては、最初（で最後）の過越祭にエルサレム入城で起こした神殿粛清の出来事も、イエスの公的活動の初めに置き換えられている。後

述するように、これはイエスのこの世における使命が十字架上の死で「完成する」(ヨハ 19:28, 30) ことを示す重要な伏線となっている。したがって、洗礼者ヨハネがイエスを指し示す言葉としての「神の子羊」は、十字架上の死に向かうイエスの姿を浮き彫りにする重要なモチーフであると言える。

II-3. ヨハ 2:1-11 カナの婚礼における「しるし」

「葡萄酒が切れてしまった時に…」(2:3) καὶ ὑστερήσαντος οἴνου
「そこにはユダヤ人たちが身を清める儀式のために石の水瓶が六つ置いてあった。…」(2:6) ἦσαν δὲ ἐκεῖ λίθινοι ὑδρίαὶ ἕξ κατὰ τὸν καθαρισμὸν τῶν Ἰουδαίων κείμεναι.

ユダヤ教の清め(καθαρισμός)の儀式のための「水」が「良い葡萄酒」(ὁ καλὸς οἶνος)になるという象徴的なエピソードである。カナの婚礼の場面は、「石の水瓶」(λίθινοι ὑδρίαὶ)が登場するが、ユダヤ教の清浄問題においては、土器が穢れをうつすのに対して石器は穢れをうつさない(レビ 11:33)²⁶⁾ものとされており、清めの儀式などの祭儀に用いられていた。ユダヤ人の清めの儀式については、ヨハ 3:25 でも言及されており、清めや水に関連するユダヤ教祭儀との関係がヨハネ福音書の中であちこちに表現されている(ヨハ 3:25; 11:55; 18:28)。ユダヤ教の清めの儀式の水が上質のワインに変化する(「葡萄酒になっている水」 τὸ ὕδωρ οἶνον γεγεννημένον, 2:9)という出来事の中で、聖性の頂点に立つエルサレム神殿を中心とした清めの儀礼や祭儀が、新しい神殿としてのイエスによって既に置き換えられているということが、このエピソードの中で暗示されている²⁷⁾。

「最初のしるし」を行った場面設定が結婚式であるということも極めて象徴的なことである。ユダヤ教の伝統では、終末におけるメシアの到来は結婚のイメージで語られ(イザ 49:18; 61:10; 62:5; エレ 33:11 雅 passim; Cf. マコ 2:19; マタ 9:15; 25:1-13; 黙 18:23; 19:7-8; 21:9 他)、極上のワインが

豊富にもてなされる様として描かれてきた（アモ 9:13-14; ホセ 14:7; ヨエ 3:18; イザ 25:6; エレ 31:21; I エノ 10:19; II バル 29:5, Cf. マタ 22:1-14; 創 49:11）。極上のワインには、こうしたメシア到来の意味が当然含まれてくる。また、ヨハ 3:29-30 において、洗礼者ヨハネがイエスを「花婿」（*νυμφίος*）と呼び、自らを「花婿の介添え人」（*ὁ φίλος τοῦ νυμφίου*）として理解している点においても、イエスの到来を結婚式で表現し、イエスを花婿として理解していることが窺えよう。ユダヤ教の結婚式は7日間続き²⁸⁾、新郎、新婦は天幕の下に座す。「天蓋の下で行われたために天蓋（*chûppāh*）と呼ばれた結婚式²⁹⁾は、明らかに、序文の「幕屋」と通じるイメージとなっている（Cf. 「わたしたちの間に幕屋を張った」 1:14）。光を灯して夜に祝われる結婚式のイメージにも³⁰⁾、「真の光」（ヨハ 1:9）として闇の世に到来したイエスのイメージと呼応する。さらに、これが「栄光」（ヨハ 2:11）を現わした出来事であるという記述は、序文における「わたしたちはその栄光を見た」（1:14）に対応する。同時に、カナの婚礼のしるしにおいては、葡萄酒の出所を知る者と知らない者が対比されており、これもまた序文でのロゴスを受け入れない者と信じる者との対比を表現していると言えよう（Cf. ヨハ 1:11-12）。

このエピソードにおいては、次の神殿粛清のエピソードほど、神殿モチーフが前面に強調されているわけではない³¹⁾。しかし、清めの儀式の水の変容という出来事のうちに、神殿としてのイエスの機能が示唆されていると思われる。

II-4. ヨハ 2:13-22 神殿粛清

「わたしの父の家を商売人の家としてはならない。」(2:16) *μὴ ποιεῖτε τὸν οἶκον τοῦ πατρὸς μου οἶκον ἐμπορίου.*

「[イエスが復活して後] 彼の弟子たちはあなたの家に対する熱意がわたしを食い尽くすだろうと書かれているのを思い起した。」(2:17)

Ἐμνήσθησαν οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ ὅτι γεγραμμένον ἐστίν, Ὁ ζῆλος

τοῦ οἴκου σου καταφάγεται με.

イエスは答えて彼らに言った、「この神殿を壊してみろ。そうすれば、三日のうちにそれを起こしてみせよう。」そこでユダヤ人たちは言った、「この神殿は四十六年かかって建てられたのだ。それなのにお前はこれを三日で起こす【と言う】のか。」だが、彼は自分の身体という神殿について話していたのであった。(2:19-21)

ἀπεκρίθη Ἰησοῦς καὶ εἶπεν αὐτοῖς, Λύσατε τὸν ναὸν τοῦτον καὶ ἐν τρισὶν ἡμέραις ἐγερῶ αὐτόν. εἶπαν οὖν οἱ Ἰουδαῖοι, Τεσσαράκοντα καὶ ἕξ ἔτεσιν οἰκοδομήθη ὁ ναὸς οὗτος, καὶ σὺ ἐν τρισὶν ἡμέραις ἐγερεῖς αὐτόν; ἐκεῖνος δὲ ἔλεγεν περὶ τοῦ ναοῦ τοῦ σώματος αὐτοῦ.

この箇所は「二枚の合わせ扉絵」(diptych)と言われるが³²⁾、前半 A (vv.13-17) と後半 B (vv.18-22) は確かに対応関係にあり、前半・後半いずれも (a) イエスの言動、および (b) 弟子の回顧から構成されている。(b) の弟子たちの回顧では、いずれも「思い出した」(ἐμνήσθησαν) という弟子たちの回顧的コメント (retrospective comment/post-Easter comment) で終わっている³³⁾。

A. 前半 [vv.13-17]: (a). イエスの言動 [vv.14-16]、 (b). 弟子の回顧 [v.17]

B. 後半 [vv.18-22]: (a). イエスの言動 [v.18-20]、 (b). 弟子の回顧 [vv.21-22]

共観福音書と比較すると、この A・B の内容は、ヨハネ福音書記者が共観福音書の異なる二つの場面を混合し、ヨハネ福音書の最初の方に位置づけたものであることが分かる。A は、共観福音書においては、エルサレム入城後に神殿から商人たちを追出す場面であり (ヨハ 2:14-16= マタ 21:12-13; マコ 11:15-19; ルカ 19:45-48)、B は、イエスの裁判での偽証者の言葉、

および十字架の下でイエスを侮辱する人々の言葉である（ヨハ2:19= マタ25:61; 27:40; マコ14:58; 15:29 「神殿を打ち壊し、三日あれば、手で作らない別の神殿を建ててみせる」）。カナの婚礼の場面で、共観福音書での悪霊のセリフをイエスのものとしたのと同様に（ヨハ2:4a）、ここでも敵対者のセリフをイエスのものとして逆手に取る皮肉的な手法が共通していると言える。

前述の通りヨハネ福音書では、「神殿」という用語は、τό ἱερόν = 「神殿の境内」と ὁ ναός = 「(神殿の) 内陣/拝殿」で使い分けられており、このエピソードにおいてその区分が明瞭に示されている。Aでは「神殿[境内]」(τό ἱερόν) あるいは「わたしの父の家」(ὁ οἶκος τοῦ πατρὸς μου) という語が使用されており、ゼカリヤ書14章がその背景にあると思われる。(Cf. ゼカ14:21 「その日には、万軍の主の神殿にもはや商人はいなくなる。」³⁴)。終末におけるメシア到来に対する待望をテーマとするゼカリヤ書を背景と考えることが可能であれば、Aのイエスの行為は、終末論的な象徴行為として理解することができよう。

これに対して、Bではイエス自身(身体)を指す「神殿(拝殿)」(ὁ ναός)として語られている。つまり、「神殿」(ὁ ναός) = イエスの身体とされ、壊されても(λυθῆναι)、三日で建て直す(ἐγείρειν)と言われるイエスの死と復活が意味されているのである。弟子たちの回顧的コメントが示しているように、ここで言われている「ご自身の身体」とは、復活したイエスの身体を指している。イエスに敵対する「ユダヤ人」たちは、τό ἱερόνも ὁ ναόςのいずれも同じ「神殿」の意味で理解しており、当時のユダヤ人一般がこの語句の区別をしていなかったことが窺われる。しかし、ヨハネ福音書は明らかにこれらの言葉を使い分けており、このヨハネ特有の「二重の意味」(double meaning/ double entendre)によってこの箇所皮肉が表現されている。ヨハ2:21のイエスの言葉には、ユダヤ教のエルサレム神殿——それはこの福音書が著された時には既に破壊されていた³⁵——に代わるものが、イエスの復活の身体に他ならないことを主張している。また、福

音書における最初の過越祭において神殿肅清が行われていることも偶然ではない。過越祭そのもの（そして、後述するようにその他のユダヤ教の祭）がイエス自身（復活のイエス）によって置き換えられているのである。

前半 A で、イエスが神殿を意味する語として「家」(ὁ οἶκος) を用いていることは（ヨハ 2:16 「わたしの父の家」）、この神殿モチーフ全体の中で重要な意味を持つ。後述の議論で明らかにするように、エルサレム神殿は、イエスが教えを説き、癒しを行い、敵対者たちと論争し、敵対者がイエスの殺害を謀る「場」であり、それは既に「商売人の家」になり下がってしまっていた。そして、「復活のイエスの身体」がこれに代わる「真の神殿」として提示されている（2:14-21）。しかし、イエスを信じる者たちが、最終的にイエスと共に「留まる」(μένω) 場を意味する言葉は、「家」なのである（Cf. 14:2、後述の議論を参照のこと）。

カナの婚礼のエピソードとこの神殿肅清のエピソードは、この世におけるイエスの使命を要約するプログラミックな物語となっているのであるが³⁶⁾、カナの婚礼でのしるし同様、この神殿肅清のエピソードにおいては、神殿（およびそれにまつわる祭儀）そのものがイエスによって置き換えられるということが示されている。ここでは、エルサレム神殿そのものとイエスの復活の身体が対比されており、イエス自身が「真の神殿」であるという主張が明瞭に看取されよう。既にカナの婚礼（2:1-11）においても、ユダヤ教祭儀（清めの儀式用の石器に入った水 2:6）がワインに変化し、清めの儀式用の水と極上のワインが対比されていた。清めの儀式の水がイエスによって変容を遂げ、極上のワインとなったその水は、終末におけるメシアの到来のように婚礼の席で人々を楽しませた。いずれも、神殿を中心としたユダヤ教の祭儀が「真の神殿」イエスの到来によって置き換えられているという主張である。これは次の 4 章（サマリアの女性との対話）——すなわち、「真の礼拝」は「場所」に限定されず、イエスの到来によって既に「今、ここで」実現しているという主張——においてさらに支持されよう。

II-5. ヨハ4:1-49 サマリアの女性との対話

「時は第六刻頃であった。」(4:6) ὥρα ἦν ὡς ἕκτη.

「活ける水(生命の水)」(4:10) ὕδωρ ζῶν

「しかし、わたしが与えることになる水を飲むなら、その人は永遠に渴くことがなく、わたしが与えることになる水は、彼のうちで、永遠の生命にほとぼしり出る水の泉となることだろう。」(4:14) ἀλλὰ τὸ ὕδωρ ὃ δώσω αὐτῷ γενήσεται ἐν αὐτῷ πηγὴ ὕδατος ἀλλομένου εἰς ζωὴν αἰώνιον.

「あなたがたは礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」
(4:20)

ὁμοίως λέγετε ὅτι ἐν Ἱεροσολύμοις ἐστὶν ὁ τόπος ὅπου προσκυνεῖν δεῖ.

「あなたがたがこの山でもなく、エルサレムでもなく、父を礼拝する時が来ようとしている。…しかし、本物の礼拝者たちが霊と真理のうちに〔あって〕父を礼拝するようになる時が来ようとしている。今がその時だ。事実、父は自分を礼拝する人々としてこのような人々を求めているのである。神は霊である。そして〔神を〕礼拝する人々は霊と真理のうちに〔あって〕礼拝しなければならない。」(4:21-24) ὅτι ἔρχεται ὥρα ὅτε οὔτε ἐν τῷ ὄρει τούτῳ οὔτε ἐν Ἱεροσολύμοις προσκυνήσετε τῷ πατρί. ...ἀλλὰ ἔρχεται ὥρα καὶ νῦν ἐστὶν, ὅτε οἱ ἀληθινοὶ προσκυνηταὶ προσκυνήσουσιν τῷ πατρὶ ἐν πνεύματι καὶ ἀληθείᾳ· καὶ γὰρ ὁ πατὴρ τοιούτους ζητεῖ τοὺς προσκυνοῦντας αὐτόν. πνεῦμα ὁ θεός, καὶ τοὺς προσκυνοῦντας αὐτόν ἐν πνεύματι καὶ ἀληθείᾳ δεῖ προσκυνεῖν.

4章のサマリア女性とのエピソードは、イエスの信仰を受け入れるひとつのタイプ（事例）として、福音書の中では3章のニコデモのエピソードと対比される形で登場している。ヨハネ福音書においては、2章から4章までが「カナ」を地理的な象徴とした囲い込み（*inclusio*）によるひとつの区分となっているが³⁷⁾、①ニコデモ、②サマリア女性、③王の役人のエピソードは、それぞれイエスの啓示に対する人間の反応（信仰）を示すものとして提示されている。三つのエピソードの中では、信仰の段階的な在り方が示されているのだが、最後の王の役人一家の信仰を受け入れるプロセスが、三つの事例の中ではヨハネ福音書の目指す理想的な信仰者の在り方（「言葉を信じて」4:50）を表現するものとなっている³⁸⁾。これに比べると、サマリア女性の信仰はどこか不完全ではあるが、最初のニコデモの無理解・不信仰とは異なり、イエスの言葉を柔軟に受け入れた例として描かれている。

さて、ここでは神殿モチーフに関連する箇所だけを取り上げるが、まず「第六刻頃」（4:6）という表現に注目したい。ヨハネ福音書において「時」の表示がある時は、何らかの重要な出来事が生じていることを示唆するが³⁹⁾、この「第六刻」とは、イエスの裁判の際にイエスが「敷石」（ガバタ）という場所で裁判の席に着かされた時刻でもある（19:14）。それはつまり、過越祭の正午ごろ、すなわち「過越の羊」の犠牲が殺される時刻である⁴⁰⁾。しかもいずれの場面においてもイエスは「座っていた・座った」（ἐκάθισεν [4:6]// ἐκάθισεν [19:13]）。こうした共通点を含め、前述の神殿モチーフ（「神の子羊」ヨハ1:29, 36）との関連で考えると、やはりイエスは「過越の子羊」として想定されているという解釈の蓋然性が高まる。（ただし上記の通り、それに限定されない。）

また、4章においては、「活ける水（生命の水）ὕδωρ ζωῶν」というモチーフが用いられている（4:10-15）⁴¹⁾。「活ける水」とは、溜まり水に対する「流れている水」（湧水、泉 [πῆγη] など）を意味し、ヘブライ語聖書においては、泉の水は「神から与えられる生命」、特にメシア時代の生命の象徴とされてきた（Cf. イザ12:3; 55:1; エレ2:13; 17:13; エゼ47:1-2）⁴²⁾。また、「神

の恵み」としての「活ける水」(ὕδωρ ζῶν)・「生命の水」(ὕδωρ ζωῆς)は、エゼキエル書47章やゼカリヤ書14章にも記述されている(Cf. ゼカ14:8; エゼ47「生命の水」; 黙7:17; 22:1)⁴³⁾。さらに、「罪を清める水」としての「活ける水」は、ユダヤ教の清めの祭儀には必須の水でもあり⁴⁴⁾、こうした「水」は「霊」と関連づけられて、ヘブライ語聖書に登場し(Cf. ゼカ13:1; イザ44:3; エゼ36:25-27; ヨエ3:1; 4:18)⁴⁵⁾、ヨハネ福音書にも、祭儀的な水と霊が関連づけられている(ヨハ1:33; 2:6; 3:5, 22)。これらにおいては、神の与える(あるいは神殿から湧き出る)水が霊と同等のものとして置き換えられている。同時に、ユダヤ教文学において水のモチーフは、「知恵」としても表現されており(Cf. I エノ48:1; 49:1; 箴13:14; 18:4; シラ24:21, 24-27)⁴⁶⁾、ヨハネ序文のロゴス賛歌が知恵文学を下敷きとしていることを併せて考慮すると、こうした預言書における「生命の水」「霊」という伝承がヨハネ福音書の中に浸透していることは明らかである。

礼拝の場としての神殿モチーフに関連して、「礼拝すべき場所」(ヨハ4:20-21)についての議論もエピソードの中にも含まれている。イエスは「あなたがたが、この山でも、エルサレムでもなく、父を礼拝するようになる時が来ようとしている」(4:21)と述べ、場所(topos)に限定されない真の礼拝について言及している。2章での「神殿」=「イエスの復活の身体」という主張と併せて考えると、物理的にひとつの場所に限定されるユダヤ教(もしくはサマリア人たち)の神殿が廃棄され、この世という場を超越した復活のイエスの身体こそ、父に対する真の礼拝の場となるということが提示されているように思われる。多くのユダヤ教文学において、神殿(エルサレム)が世界の中心であり、その神殿の基から流れ出る水のイメージをメシアの理想郷として描き出している(III エノ22B:7 [神の玉座から]、ソロ頌6:7-13; アリステアス88-91; ヨセフス『ユダヤ古代誌』1:38-39)のだが⁴⁷⁾、ヨハネ福音書も同じようにイエスの復活の身体をもってこのメシアの理想郷としての神殿のイメージで描いているのである。

また、この場所/場という空間的メタファーは、物理的・具体的なトポス

を指示するものではなく、ヨハネ福音書においては、「機能」における同一性・一体性を意味している（Cf. 14:3, 18, 19, 23; 17:24）。すなわち、「真の礼拝」（4:22-24, 「真の礼拝をする者たち」 οἱ ἀληθινοὶ προσκυνηταί, [v.23]）とは⁴⁸⁾、父とイエスが同じ働きをするように（14:10-11）、イエスと同じ働きをする者たち（14:12）のことを意味している。それはつまり、「霊と真理のうちにあつて礼拝する」者のことであり、ヨハネ福音書においてはイエスが真理として提示されており（Cf. 14:6 「わたしは道であり、真理であり、生命である」）、イエスのうちにおける礼拝という意味の中に、明らかに神殿としての機能を果たすイエスが提示されている。同時に、イエスを信じる者たちは霊を受ける（ヨハ 7:38-39; 14:17; 20:22; I ヨハ 2:27; 3:24; 4:13）。そして、この霊が、信じる者たちにおける神の臨在と真の礼拝を可能にするのである。

このように、4章の背景は、エゼキエル書 47 章が下敷きにされていることは明らかである。ヨハネ福音書において「活ける水」とは、（十字架刑に処せられた高挙の）啓示者イエスを通じて与えられた「霊」による生命である⁴⁹⁾。既に 3 章で、水は霊や知恵と相関的に用いられ（Cf. 3 章「水」と「霊」[3:5]、「風」と「霊」[3:8]との相関関係）、「水と霊によって生まれる」「上から（新たに）生まれる」という内容が伝えられている。4 章はこれを一歩深めて、「水と霊によって生まれた」者が行う「真の礼拝」を説明する。それは特定の場所に限定されず、「霊と真理のうちに行われる。すなわち、イエスを信じる人々の「うちに」住まい、活ける水を注ぎ出す霊による礼拝である。

II-6. ヨハ 5:1-10:39 (5:1-47; 7:1-8:59; 10:22-39)

イエスが教えを説く場⁵⁰⁾、ユダヤ人との抗争の場としての「神殿」

ヨハネ福音書 5-10 章では、神殿（および祭）におけるイエスとユダヤ人たちの論争場面が続く。このセクションは、次の三つの論争から構成されて

いる。すなわち、①ヨハ 5:1-47「ユダヤ人の祭・安息日の癒し」から始まる論争、②ヨハ 7:1-8:59「仮庵祭での出来事」⁵¹⁾、③ヨハ 10:22-39「神殿奉獻祭での出来事」。これらの場面においては、第3回目のガリラヤ宣教の記述（ヨハ 6:1-7:9）を除いて⁵²⁾、いずれも祭もしくは祭の中の安息日が舞台となっており、各エピソードもそうした祭との関連が示唆されている。以下では、この区分に従って議論する。

II-6-1. ヨハ 5:1-47 論争① 「ユダヤ人の祭・安息日の癒し」

「この後、イエスは神殿〔境内〕で彼を見つける。」 μετὰ ταῦτα εὕρισκει αὐτὸν ὁ Ἰησοῦς ἐν τῷ ἱερῷ (5:14)

5章は、「ユダヤ人の祭」(5:1)の際に、イエスが安息日に病人を癒すエピソード(5:1-18)で始まり、その後、イエスの権威の問題(5:19-30)、イエスについての証し／誉れ(5:31-47)に関する論争が続く。(ただし、5:19-47はイエスの独白である。)細部についての議論は省くが、エルサレムで病人を癒すと信じられていたベトザタの池の水の機能が廃れ、イエスの言葉(「起きなさい…そして歩きなさい」5:8)がより効果あるものとして示される。ここでも水の機能が暗にイエスの言葉と置き換えられている。また、この癒しが安息日に行われたことも意義深い。安息日の本来の意義——人が「良く」(「健全で」ὕγιής, 5:6, 9, 11, 14, 15)あること、すなわち、創造された人間の本来の姿に戻ることを、イエスは「今も働く父」(5:17)と同じように実現するのである。その後イエスはこの癒しを受けた人と再び「神殿の境内で」出会い、敵対者たちとの論争に入る。ここでの論争の争点(としてナレーターが説明しているもの)は、イエスが「神を御自分の父と呼び、自分を神と等しい者とした」(5:18)ということであるが、これらは神殿を舞台としている。

II-6-2. ヨハ 7:1-8:59 論争② 「仮庵祭での出来事」⁵³⁾

「既に祭りが半ばとなった頃、イエスは神殿〔境内〕にのぼって教え始めた。」(7:14)

Ἦδη δὲ τῆς ἑορτῆς μεσοῦσης ἀνέβη Ἰησοῦς εἰς τὸ ἱερόν καὶ ἐδίδασκεν.

…

「そこで、イエスは神殿〔境内〕で教えている時に、叫んだ。〔次のように〕言って、『あなたがたはわたしが分かっており、どこから〔の人〕であるかも分かっている…』」(7:28) ἔκραξεν οὖν ἐν τῷ ἱερῷ διδάσκων ὁ Ἰησοῦς καὶ λέγων, Καμὲ οἴδατε καὶ οἴδατε πόθεν εἰμί·

…

「祭り(仮庵祭)の盛大な最終日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。『渴いている人は誰でも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言った通り、その人の内から活ける水の川が〔何本も〕流れ出るようになる。』イエスはご自分を信じる人々が受けようとしている霊について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けていなかったのも、霊がまだ降っていなかったからである。」(7:37-39)

Ἐν δὲ τῇ ἐσχάτῃ ἡμέρᾳ τῇ μεγάλῃ τῆς ἑορτῆς εἰστήκει ὁ Ἰησοῦς καὶ ἔκραξεν λέγων, Ἐάν τις διψᾷ ἐρχέσθω πρὸς με καὶ πινέτω. ὁ πιστεύων εἰς ἐμέ, καθὼς εἶπεν ἡ γραφή, ποταμοὶ ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ ῥεύσουσιν ὕδατος ζῶντος. τοῦτο δὲ εἶπεν περὶ τοῦ πνεύματος ὃ ἔμελλον λαμβάνειν οἱ πιστεύσαντες εἰς αὐτόν· οὐπω γὰρ ἦν πνεῦμα, ὅτι Ἰησοῦς οὐδέπω ἐδοξάσθη.

「早朝、彼はまた神殿〔境内〕(τὸ ἱερόν) にやって来た。」(8:2)

「これらの言葉を、神殿〔境内〕で教えていた間に、宝物殿の中で語っ

た。」(8:20)

「だが、イエスは身を隠して、神殿〔境内〕から出て行った。」(8:59)

この一連の神殿での議論は、スコットと呼ばれる仮庵祭 (Feast of Tabernacle) を舞台としている。一般にユダヤ教の中で呼ばれている「天幕の祭」(ἡ ἑορτὴ τῶν σκηνῶν) という仮庵祭の名称は、ヨハ 1:14 と通じるものがある⁵⁴⁾。仮庵祭は、ティシュレイ (9-10 月) の 15 日 (レビ 23:34-36) から 7 日間祝われ、またミシュナ第二編「モエード」第六部「スッカー」*Sukka* 4:9 によれば、後に 8 日目が追加された⁵⁵⁾。この祭りの起源はカナン人の収穫祭にあるが、イスラエルの祭りとして定着してからは、「主の王としての即位」がテーマとして祝われる祭となった (Cf. 詩 9, 43, 76, 81, 93, 113-118)⁵⁶⁾。この祭の儀礼として特徴的なのは、祭が最大に祝われる 8 日目の「水の儀式」であり⁵⁷⁾、シロアムの池⁵⁸⁾ から水を汲み、祭司たちが祭壇の基に水とワインを注ぐ。ゼカリヤ書 14:20 にある「祭壇の前の鉢」とは、この時使用する銀製のボールのことを述べている。祭司たちは、これらの銀製のボールで祭壇に水とワインを注ぐのである⁵⁹⁾。

仮庵祭における神殿と水との関連を考慮すると、ここでのテキストの背景にも、紛れもなくエゼ 47 章の「新しい神殿の幻」のイメージが流れている (Cf. ヨハ 7:37-38)。「聖所から流れ出」(エゼ 47:12)、「生き物のいのちを生かす」(ゼカ 47:9-10) 水のイメージは、特にヨハ 7:38 「その人の内から活ける水の川が流れ出るようになる」というイエスの言葉を重ね合わせることができる⁶⁰⁾。ヨハ 7:37-39 は、仮庵祭でのイエスの頂点として描写されているのであるが (「イエスは立ち上がって大声で言われた」7:37)⁶¹⁾、28 節での叫びがイエスのアイデンティティ (出自) に関わる発言——父との関わり——であるのに対して、37 節はイエスが神からこの世に派遣された目的に関わっている。イエスの内から流れ出、人々のいのちを生かす「生命の水」のイメージは、イエス自身が新しい神殿であるという主張と見事に合致する。明らかに、ヨハネ 4 章の「活ける水」との関連も示唆されている (Cf. ヨハ 4:14)。

既に4章で説明したように、霊と水の関連については、ヨハネ福音書においても、7:39で明確に言及されている。

そして、エゼキエル書を踏まえたゼカリヤ書14章もこのテキストの重要な背景として浮き上がってくる。ゼカ14は、「主の王としての即位」を表現しており（Cf. ゼカ14:8-9, 16）⁶²⁾、第二神殿時代後期には、仮庵祭で朗読される「ハフター」のひとつであった⁶³⁾。こうしてゼカリヤ書を背景と考えると、ここに終末論的な「終末における（主の）王としての即位」や「主への普遍的な礼拝（universal worship）」という意味合いを読み取ることができる。ここでのイエスとユダヤ人たちの論争の争点が、イエスのアイデンティティ——「イエスがメシアであるか」（7:26, 41）、あるいは「イエスの出自」（Cf. 7:28「どこの出身か」）——についてであることを併せて考えると、仮庵祭でのテーマや祭儀とイエス自身のアイデンティティが結びついた形で提示されていると思われる。すなわち、イエスこそが真のイスラエルの王であるという主張が、この祭を背景として提示されているのである。ここでは、ユダヤ人たちが祝う祭の意図の本質を具現化しているイエスに焦点が当てられていると言えよう。

また、前述の「スッカー」*Sukka* 5, 2-4によると、後に仮庵祭には「光の祭儀」（illumination）と呼ばれる儀式も追加されたようである。この儀式は、神殿の「女性の庭」（court of women）で1日目に行われ、光をモチーフとしていたと言われる⁶⁴⁾。ヨハ8:12-20において、イエスが「宝物殿の近くで」（「女性の庭」付近）自らを「世の光」であると語ったことも、イエスと光の儀式との関連を示唆し、かつ光の祭儀に対し、自分が「真の光」（ヨハ1:9）であると主張しているとも考えられよう⁶⁵⁾。

II-6-3. ヨハ10:22-39 論争③ 「神殿奉献祭での出来事」

「イエスは神殿〔境内〕でソロモンの柱廊を歩いていた。」(10: 23)
καὶ περιεπάτει ὁ Ἰησοῦς ἐν τῷ ἱερῷ ἐν τῇ στοᾷ τοῦ Σολομῶνος.

「あなたがたの律法に、『私は言った。あなたがたは神々である（詩 82:6-7）』と書かれているのではないか。神の言葉の臨んだ人々、その人々を神々と言っており、そして聖書の廢れることがありえないとすれば、〔それにもかかわらず〕父が聖別して世に遣わしたわたしが『自分は神の子だ』と言ったからと言って、あなたがたは『お前は冒瀆している』と言うのか。」(10:34-36) ἀπεκρίθη αὐτοῖς [ὁ] Ἰησοῦς, Οὐκ ἔστιν γεγραμμένον ἐν τῷ νόμῳ ὑμῶν ὅτι Ἐγὼ εἶπα, Θεοὶ ἐστε; εἰ ἐκείνους εἶπεν θεοὺς πρὸς οὓς ὁ λόγος τοῦ θεοῦ ἐγένετο, καὶ οὐ δύναται λυθῆναι ἡ γραφή, ὃν ὁ πατήρ ἡγίασεν καὶ ἀπέστειλεν εἰς τὸν κόσμον ὑμεῖς λέγετε ὅτι Βλασφημεῖς, ὅτι εἶπον, Υἱὸς τοῦ θεοῦ εἰμι;

ここでの論争は、ハヌカとして知られる神殿奉献祭が舞台となっている (I マカ 4; II マカ 10)⁶⁶⁾。ユダ・マカバイの乱において、偶像を取り除き、「神殿を清め、新たな祭壇を築いた」(II マカ 10:3, τὸν νεὸ καθάρισαντες ἕτερον θυσιαστήριον ἐποίησαν) ことを記念とする神殿奉献祭は、キスレウの月 (11 ~ 12 月) の 25 日に祝われる (I マカ 4:52-58)。仮庵祭にならって 8 日間祝い、毎年恒例の祭りとなった (II マカ 10:6-8)。ハヌカは、仮庵祭と時期的に近く、人々はその祭とのつながりを感じていたようである (Cf. II マカ 10:6)。

ユダヤ人たちは、イエスが本当にメシアであるかどうかを詰め寄り (ヨハ 10:24)、イエスの言葉を受けて、彼を石で打ち殺そうとする (10:31)。イエスが自らを「メシア」(ヨハ 10:25)・「神の子」(10:36) であると主張することは、イエスの敵対者にとってはイエスがアンティオコス IV のような「冒瀆者」であると映るが、イエスを信じる者たちにとっては、イエスの主張は神殿奉献祭の本来の意義との関連で意味がある。つまり、神殿奉献祭は、真の神への神殿の奉献 (dedication) であり、穢された祭壇を新しくすること

(ἐγκαινίζειν, ἐγκαινισμός= “renewal/ inauguration” [I マカ 4:36, 54, 56, 59; 5:1; II マカ 10:1-8]) であった⁶⁷⁾。したがってここには、イエスこそが、父が「聖別して遣わした者」なのであり、新しい「真の神殿」、そして「新しい祭壇」であるという主張が見られるのである。

安息日、仮庵祭、および神殿奉献祭におけるイエスのエルサレム神殿での存在 (presence) は、「新しい神殿」(祭壇)としての復活のイエスの身体が、エルサレム神殿に代わるものであることを主張している。また、神殿(および祭)を舞台とした5-10章までのユダヤ人との論争場面は、その争点からすると、サンヘドリンでのイエスの裁判の場面が先取りされていると思われる。特に、ヨハ 10:24-25 は、共観福音書におけるイエス裁判の争点と重なり、イエスのメシア性が問題となっている(マコ 14:61-62; マタ 26:62-64; ルカ 22:67-68)。ヨハネ福音書はこれをヨハネ的に再解釈し、イエスのアイデンティティ、つまり、父との一致(7:16, 28-29; 10: 25, 30, 36-38)およびイエスの出自(8:23, 26-29)を提示しているのである。つまりヨハネ福音書では、神殿粛清のエピソードだけではなく、サンヘドリンにおける敵対者との裁判の場面も、福音書前半に先取りされていると言えよう。そして、これらの場面では、エゼキエル書の「新しい神殿」のイメージ——エゼ 47 とゼカ 14 の神殿イメージ——が主要な背景となり、「新しい神殿」として自らのうちに活ける水を注ぎ出し生命を与える真の「イスラエルの王」「神の子」イエス(ヨハ 1:49)のアイデンティティが提示されている。

II-7. ヨハ 11:45-57 イエスの敵対者たちがイエス殺害を企む場

「ローマ軍が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。」(11:48)

οἱ Ῥωμαῖοι καὶ ἀροῦσιν ἡμῶν καὶ τὸν τόπον καὶ τὸ ἔθνος.

「彼らのうちのある一人の人、その年に大祭司であったカイヤファが彼らに言った、『あなたがたには何も分かっていない。一人の人間が民の

ために死んで、民族全体が減びないで済むことが、自分たちにとって得策だということ。』(11:49-50)

εἷς δέ τις ἐξ αὐτῶν Καϊάφας, ἀρχιερεὺς ὧν τοῦ ἐνιαυτοῦ ἐκείνου, εἶπεν αὐτοῖς, Ὑμεῖς οὐκ οἶδατε οὐδέν, οὐδὲ λογίζεσθε ὅτι συμφέρει ὑμῖν ἵνα εἷς ἄνθρωπος ἀποθάνῃ ὑπὲρ τοῦ λαοῦ καὶ μὴ ὅλον τὸ ἔθνος ἀπόληται.

「さて、人々はイエスを求め、神殿〔境内〕に立って互いに言い合っていた、『あなたがたはどう思うか。彼は祭りには来ないだろうか。』」
ἐζήτουν οὖν τὸν Ἰησοῦν καὶ ἔλεγον μετ' ἀλλήλων ἐν τῷ ἱερῷ ἐστηκότες, Τί δοκεῖ ὑμῖν; ὅτι οὐ μὴ ἔλθῃ εἰς τὴν ἐορτήν; (11:56)

ヨハ 11:48 で「神殿」と訳されているギリシア語は「場所」(τόπος) である。ユダヤ文学の中で、「場所」(τόπος, Heb. māqôm) は、次の意味で用いられている。すなわち、①「主」(『創世記ラッバー』*Gen. Rab.* 68:9; バビロニア・タルムード『アヴォダー・ザラー』*b. 'Abad.Zar.* 40b)、②「約束の地」(II マカ 1:29)、③「エルサレム」(ミシュナ『ビククリーム』*m. Bik.* 2:2)、そして④「神殿」(II エズ 14:7 [LXX])⁶⁸⁾。ここでは、約束の地の首都であるエルサレムに位置し、神の臨在の場としての「神殿」が明らかに意図されている (Cf. ヨハ 4:20; 使 6:13-14; 7:7)⁶⁹⁾。

ヨハネ福音書においては、人の子イエスは父である神からこの世に派遣され、その使命(世への啓示)を、受肉・十字架上の死という出来事を通して実現し成し遂げ、父のもとに帰還する。この「派遣神学」においては、罪(悪)に取り込まれてしまった「この世」の人間たちに、啓示の業を通して「解放」(=この世における救いの実現)をもたらすという基本構造が現れている⁷⁰⁾。ヨハネ福音書は、神と人間とのかかわりが何らかの形で分断され、しかも、「この世」は神から切り離され、悪(神に反するもの)が支配する「世」(Cf. 「この世の支配者」[ὁ ἄρχων τοῦ κόσμου τούτου] 12:31, 42; 14:30;

16:11) であるという世界観を前提とし⁷¹⁾、この現実に対して、神の救いの現実と勝利が物語られる。イエスの十字架上での死(啓示)は、紛れもなく、「この世」から人々を解放するための契機であり、救済論的意義と機能を持つ出来事である。ヨハネ福音書が、イエスの死を「罪の贖い」(expiatory)のための犠牲として記述する箇所があり、その死を「人々のための犠牲死」(vicarious death)として提示していることは間違いない。したがって、ヨハネ福音書においても、イエスの代理死を「贖罪死」として想定できるならば、ヨハネはその独自の神学的フレームの中で、贖罪論⁷²⁾を展開していると言えるのではないだろうか。実際、近年、ヨハネ福音書における受難(十字架上での死)にヨハネ的贖罪論——ヨハネ福音書における「十字架の神学」(theologia crucis)——を考察する見解が強まっている⁷³⁾。

既に「神の子羊」(ヨハ1:29, 36)という表現(=イエスは世の罪を取り除くために献げられる犠牲)の中に贖罪論的思想を看取できるのであるが、この場合は、イエスの犠牲死が罪を取り除く(expiatory)機能を果たすと見做されていると言えよう。大祭司カイヤファの無自覚な預言の言葉(11:50)の中にも、贖罪思想に関わる用語がいくつか盛り込まれている。まず、「~のために死ぬ」(ἀποθανεῖν ὑπέρ)は、典型的に「贖罪論」——代理死(vicarious death)——との関連で重要なフレーズであり、この「代わりに死ぬ」「~のために(ὑπέρ)死ぬ」、という定型句を贖罪論的に理解することができる。これは10章の良き羊飼いの譬えの中でも繰り返され(ヨハ10:11, 15「羊のために命を捨てる」[τὴν ψυχὴν μου τίθημι ὑπὲρ τῶν προβάτων])、告別説教においても強調されている(ヨハ15:13「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」[μείζονα ταύτης ἀγάπης οὐδεὶς ἔχει, ἵνα τις τὴν ψυχὴν αὐτοῦ θῆ ὑπὲρ τῶν φίλων αὐτοῦ])。しかも、ヨハネ福音書記者は、これをもう一度大祭司の邸宅でのイエス裁判の場面で繰り返している(18:14)ところからも、その重要性が窺える。同時に、カイヤファが「その年の」大祭司であったことも強調され(11:49, 51; 1:18)、ここには大祭司には預言する力が与えられるというユダヤ教の伝統が踏襲さ

れており⁷⁴⁾、しかもそれが図らずしも本人の意図とは別のところで実現していくという事実の中に、ヨハネ的な鋭い皮肉が込められている。

同時に、「あなたがたにとって好都合である」「あなたがたのためになる」(συμφέρει ὑμῖν) という表現もまた、ギリシア思想において倫理的判断の基準となる用法を示し⁷⁵⁾、事実イエス自身の言葉としても告別説教の中で語られるのである(「わたしが去っていけば、あなたがたのためになる」[συμφέρει ὑμῖν ἵνα ἐγὼ ἀπέλθω] 16:7)。

カイヤファは、「国民」(ἔθνος) のために死ぬ(11:50)と言ったのであるが、ナレーターはこれを52節で解説し、真の目的(意味)について明言し、言い換えている(「散らされた神の子たち [Cf. 10:16] をひとつに集めるために(代わりに)『死ぬ』 ἵνα καὶ τὰ τέκνα τοῦ θεοῦ τὰ διεσκορπισμένα συναγάγη εἰς ἓν, Jn 11:52)。ここには、「良き羊飼い」(10章)や告別説教(17章)に表れる、真のイスラエルを「ひとつ」に集めるという「一致のモチーフ」(Oneness motif) が表現されている⁷⁶⁾。

II-8. ヨハ 12:12-19 エルサレム入城

「祭りに来ていた大勢の群衆は、…なつめやしの枝をもって迎えに出た。」(12:12-13) ὁ ὄχλος πολὺς ὁ ἐλθὼν εἰς τὴν ἑορτήν, ... ἔλαβον τὰ βᾶϊα τῶν φοινίκων καὶ ἐξῆλθον εἰς ὑπάντησιν αὐτῷ ...

エルサレム入城の場面において、神殿に関連すると思われる箇所について指摘したい。この場面で、大勢の群衆はイエスを迎える際に、「なつめやしの枝」(τὰ βᾶϊα τῶν φοινίκων) を持っていた(ヨハ 12:12)。共観福音書における同じ場面と比較すると、「なつめやし」(palm-tree, φοινίξ) の記述はヨハネ福音書特有のものであり、共観福音書には登場しない記述である(Cf. マコ 11:8; マタ 21:8; ルカ 19:36)。「なつめやし」は、ソロモンの第一神殿の壁面に施された飾りモチーフであり(王上 6:32, 35; 7:36; 歴下

3:5)、エゼキエル書の「新しい神殿の幻」にあらわれる「モチーフ」でもある (Cf. エゼ 40:26「七段の石段を上ると、その先に廊があり、なつめやしの飾り (φοίνικες, Heb. timōrâ) がひとつずつ両側の脇柱にあった」。他にもエゼ 40: 31, 34, 36)。また、エゼキエルの新しい神殿の「至聖所」(τὸ ἅγιον τῶν ἁγίων, エゼ 41:1//「拜殿」(ὁ ναός) エゼ 41:21) には「ケルビムとなつめやしの模様」(τὰ χερουβὶν καὶ οἱ φοίνικες) が刻まれていたとされている (Cf. エゼ 41:18, 25, 26)。イエスを迎える群衆が「なつめやしの枝」を手にしていたという記述には、これまでの一連のエゼキエル書の「新しい神殿」が示唆されてきた文脈で考えると、群衆が、意図せずして——この点、大祭司の預言と同じように皮肉が込められていると解釈することもできる——イエスを新しい神殿として迎えていると理解することが可能なのではないだろうか。

ただし、エルサレムに入城するイエスの姿には、何よりもまず、ゼカリヤ書・ゼファニア書の預言の成就として、メシアであり王であるという主張が表現されている。引用されている聖書箇所に関しては、ヨハ 12:13「ホサンナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に」では詩 118:25-26 およびゼファ 3:15 が⁷⁷⁾、またヨハ 12:15「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、ロバの子に乗って」では、ゼカ 9:9; 14:4, 5 およびゼファ 3:14 など⁷⁸⁾ の混合された表現が引き合いに出されており、いずれも預言の成就として終末におけるメシア的な王、万物の王のエルサレム凱旋入城が描写されている。「イスラエルの王」という呼称は、マルコ福音書およびマタイ福音書では十字架上のイエスに対する敵対者たちの侮蔑の言葉であったが (マコ 15:32、マタ 27:41)、ヨハネ福音書ではこれがイエスの正当な尊称として受容されている (ヨハ 1:49; 12:13)⁷⁹⁾。この意味では、一般的に解釈されるように、「なつめやし」は、軍の凱旋、王への歓呼・歓声の意味を含み (I マカ 13:51; II マカ 10:7; 14:4)⁸⁰⁾、群衆がイエスを「ナショナルリスティック (国民的) な王」(ユダヤの王) として歓迎していたあり様をそうした背景から理解できる。また、同時に「なつめ

やし」は「永世」（永遠の生命）の象徴として広く地中海世界で理解されており⁸¹⁾、この場面を挟み込む「ラザロの復活」についての言及（ヨハ 12:9-11//12:17）からすると、「なつめやし」の象徴はむしろ、「生命の与え主」としてのイエスに焦点を当てていると考えられる。いずれにしても、この場面でのイエスの姿には「メシア」「イスラエルの王」の凱旋と栄光が前面で高らかに謳われており、神殿モチーフはその後景に過ぎない。しかしながら、イエスが「栄光を受ける時」（12:23）は、同時にイエスの十字架における死の時でもあり、12:24 の一粒の種の譬えには、まさにイエスの代理死（贖罪死）のことが含蓄されている。したがって、後景に置かれながらも、やはり「神殿モチーフ」としてのイエスの姿がここにも描かれていると言えるのではないだろうか。

ヨハ 12:16 には、「これらのことを弟子たちは当初は知らなかった（οὐκ ἔγνωσαν）。しかしイエスが栄光を受けた時、その時になってこれらのことが彼について書かれたのであり、これらのことを人々が彼に行ったのだということを感じ起こした（τότε ἐμνήσθησαν）」という弟子たちの回顧的な感想が述べられている。この回顧は、ヨハ 2:22 における弟子たちの回顧的な感想と「囲い込み」（*inclusio*）を形成しており、弟子たちがイエスの栄光（＝受難、死、復活）を観る視点から、この出来事を回顧する視点が物語の中に盛り込まれている⁸²⁾。ヨハネ福音書における「神殿キリスト論」の記述は、こうしてこの囲い込みの中で完結しているのである。

II-9. ヨハ 19:1-37 受難・十字架上の死

- | |
|---|
| <p>A. 「裁判の席に着いた。…時刻は第六刻の頃であった。」（19:14）</p> <p>B. 「この後、イエスは聖書が成就されるためには（ἵνα τελειωθῇ ἡ γραφή）、既に万事が成し遂げられた（ὅτι ἤδη πάντα τετέ-</p> |
|---|

λεσται) ことを知り、言う。『渴く』(διψῶ)」(19:28)

「酢を満たした器が置いてあった。」(19:29) σκεῦος ἔκειτο ὄξους μεστόν

「イエスはこの葡萄酒を受け取ると、『成し遂げられた』(Τετέλεσται) と言い、頭を垂れて、霊を引き渡した(παρέδωκεν τὸ πνεῦμα)。」(19:30)

C. 「それで、[人々は] その酢をたっぷり含ませた海綿をヒソプの枝に巻きつけて、彼の口のところに差し出した。」(19:29)

「既に死んでいるのを見て、その足を折ることはしなかった。」(19:33)

「すぐに血と水が流れ出た。」(19:34) ἐξῆλθεν εὐθὺς αἷμα καὶ ὕδωρ

「つまり、これらのことが起こったのは、その骨が打ち碎かれることはないであろう(Ὅστούν οὐ συντριβήσεται αὐτοῦ)、という聖書が満たされるため(ἵνα ἡ γραφή πληρωθῆ) だったのである。」(19:36)

D. 「また、聖書の別の箇所は、彼らは自分たちが刺し通した人を見るであろう(Ὁψονται εἰς ὃν ἐξεκέντησαν)、と言っている。」(19:37)

前述のように、「神殿キリスト論」の記述がヨハネ福音書の前半(1-12章)までに集約しており、十字架上でイエスの死の場面に、こうした「新しい神殿」のモチーフが総括される形でその記述の中に織り込まれている。

まず、Aのイエスが裁判の席に着く時刻は、4章[サマリアの女性との対話/活ける水]と明らかに関連しており、この時刻は、犠牲の羊が屠殺される時刻でもあった(前述の4章の議論を参照のこと)。その意味では、洗礼

者ヨハネの呼びかけ通り、イエスは「神の子羊」、すなわち、過越祭の犠牲の羊として提示されている（「神の子羊」関連はCで説明する）。

Bにおいてもやはり水に関連する言葉（「渴く」）が登場しているが、4章においても水のイメージは、エゼキエル書（47章、他）を下敷きとして表現されていた。「渴く」という言葉のうちには、サマリア人の女性との対話で垣間見せた人間性（ヨハ4:6-7「旅に疲れて」、「『水をください』」）とのつながりも明らかであり、この受難の場面においても、イエスの人間性——死すべき性質（mortality）としての人間性——が明示されていると同時に、イエスの地上での啓示の業が、この十字架において「完成した」（τετέλεω, 19:28a, 30b）ことが、この「完成（成就）した」という言葉の挟み込みにより強調され、かつ宣言されている。また、「渴く」という表現は、ヨハ7:37-38の仮庵祭での宣言（v.37b-38）とナレーターの説明（v.39）も想起させ、十字架上で「霊（πνεῦμα）を引き渡した」（ヨハ19:30）ことにより⁸³⁾、霊の降りがここにおいて実現する⁸⁴⁾。3章および4章での「霊」および「風（息）」・「水」との相互関連のイメージは、19:30を経て、20:22で頂点を迎え⁸⁵⁾、神殿としてのイエス（神殿キリスト論）がこれら一連のイメージを繋ぎとめる機能を果たしているのである。

さらにBにおいて、「酢」と訳されている ὄξους は水で薄められたワインである⁸⁶⁾。共観福音書よりもヨハネ福音書の方が詩篇68:22の記述（LXX）をより正確に反映していると言えよう（「わたしの渴きに、わたしに酸い葡萄酒を飲ませようとする」 καὶ εἰς τὴν δίψαν μου ἐπότισάν με ὄξος⁸⁷⁾）。ここに登場する「酸い葡萄酒」や「酢を満たした器」（σκεῦος ὄξους μεστόν）は、2章との関連が示唆されている。また、2章と19章のいずれにおいても「イエスの母」が登場するという共通性からも（2:1-5//19:25-27）、その関連性は支持されよう。2章においては、「時」の到来以前の母の要求に対して、水をワインに変化させるという「最初のしるし」を行うが、ここ19章においては、「時」が到来した今、その最期のしるしのうちに、自らの身体（脇腹）から「水と血」を注ぎ出すのである（19:34⁸⁸⁾。流れ出る血の

意味は、過越の子羊との関連でも明らかであろう。過越の犠牲の子羊は、ザクロの木で「刺し貫かれ」（ミシュナ『ペサハー』*m. Pesah* 7:1）、その血は祭壇に振りかけられるからである⁸⁹⁾。また、同時に流れ出た「水」の意味も、神殿モチーフにとっては非常に重要である。これまで福音書を一貫して流れてきた「水」のイメージ（1:31, 33; 2:6; 3:5; 4:14; 5:2; 9:7; 13:5）を総括すると共に、7:37-39における「霊の降る約束」が、イエスが栄光を受けた今、34節において実現するのである。エゼ47およびゼカ14が背景としてあることは疑いえない。イエスの身体が「生命の水」（霊）を注ぎ出す姿は、終末における神の神殿そのものをあらわしている。

次にCにおいては、過越の儀式で重要な役割を果たす「ヒソプ」（出12:22）が、この十字架の場面においても言及されており（前述のヨハ1:29, 36の説明を参照）、明らかに1章29, 36節「神の子羊」との関連を再度見て取ることができる。33節の折られなかったイエスの足骨もこの関連を示し、36節の「その骨はひとつも砕かれない」は出12:46からの引用（LXX、καὶ ὅστωὺν οὐ συντρίψετε ἀπ' αὐτοῦ）⁹⁰⁾であり、紛れもなくこの点を強調している。

最後に、Dでは、ゼカ12:10「彼らは、自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き…」（ἐπιβλέπονται πρὸς με ἀνθ' ὧν κατορχήσαντο καὶ κόπονται ἐπ' αὐτὸν κοπετὸν ὡς ἐπ' ἀγαπητὸν...）が引用されている。上記の過越の子羊が「刺し貫かれる」様子との関わりにおいてこの引用は興味深いが、イエスがメシアであることを最終的にこの引用によって証言していると言えよう。この刺し貫かれた者が「挙げられた」（高挙）者であり、これによって人々に救いをもたらすことは、福音書を通底しているテーマのひとつであった（3:14-15; 8:25; 12:32-33）。

こうして見ると、19章（十字架の場面）においては、福音書前半において提示されてきた神殿モチーフが総括的に繰り返されている。新しい神殿のイメージ（エゼ47およびゼカ14）がこのモチーフ全体の下敷きとなっ

ているが、4章での「活ける水」「生命の水」と神殿との関わり、2章のカナの婚礼におけるユダヤ教祭儀の廃止と新しい神殿イエスによる置き換え、1章での「贖罪としての犠牲」(1:29, 36)が、「イスラエルの王」「メシア」としての受難物語の中に織り込まれているのである。

II-10. ヨハ 2:16; 8:35; 14:2 「父の家」

「わたしの父の家を商売の家としてはならない。」(2:16)

「奴隷はいつまでも家にはいかないが、子はいつまでもいる。」(8:35)

ὁ δὲ δοῦλος οὐ μένει ἐν τῇ οἰκίᾳ εἰς τὸν αἰῶνα, ὁ υἱὸς μένει εἰς τὸν αἰῶνα.

「わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。」(14:2)

ἐν τῇ οἰκίᾳ τοῦ πατρός μου μοναὶ πολλαὶ εἰσὶν· εἰ δὲ μή, εἶπον ἂν ὑμῖν ὅτι πορεύομαι ἐτοιμάσαι τόπον ὑμῖν;

「父の家」で表現されるこれらの箇所は、「イエス＝(新しい) 神殿」というモチーフのひとつのヴァリエーション(変奏)として想定することができよう。「神の子」(イエスを信じる者たち Cf. ヨハ 1:12)が神と共にある「場」としての「父の家」が想定されている。既にヨハ 11:45 での議論で見たように、「散らされた神の子たちをひとつに集めるために(イエスは)死ぬ」のであるが、「ひとつに集まる」という共同体の場として「父の家」という表現が用いられている。イエス自身が最終的に父のもとに「帰還」するように、イエスを信じる者たちも「父の家」に帰還する。そして、この帰還のルートを開くために、イエスの十字架上の死がある。しかし、「場所」のメタファーを用いながらも、ヨハネ福音書においては、イエスと父との一体性とその機能(働き)によって証明されるように(ヨハ 5:26-27, 30; 14:9-11)、

イエスを信じる者たちとイエスとの一体性も、その働きにおいて認められるのである（ヨハ 12:26; 13:14-15, 34-35; 14:12, 23; 15:12）。ヨハ 12:16 では、「わたしの父の家」という表現から、YHWH の独り子としてのイエスの姿が表現され、また、ヨハ 2:19 では、神殿としての「イエスの復活の身体」が意味されていた。また、8:35 においては、「奴隷は家にいつまでも家に留まるものではない。子が永遠に留まるのである」という短い一節の中に、父である神、イエス、そしてイエスを信じる者たち（すなわち、「神の子たち」 Cf. ヨハ 1:12）の一体性をあらわすキーワード、「留まる」（μένω）が効果的に用いられている（Cf. ヨハ 15:4[x3], 5, 6, 7 [x2], 9, 10 [x2], 16）。一人の家長（父親）の下にあるひとつの世帯（household）・家族全体が表現されており⁹¹⁾、14:2 では霊の現存におけるイエスと彼を信じる者たちの永遠の一体性が約束されている。その働きにおいて一体性を示す神、イエス、そしてイエスを信じる者たちが、家族のメタファーで描かれている。

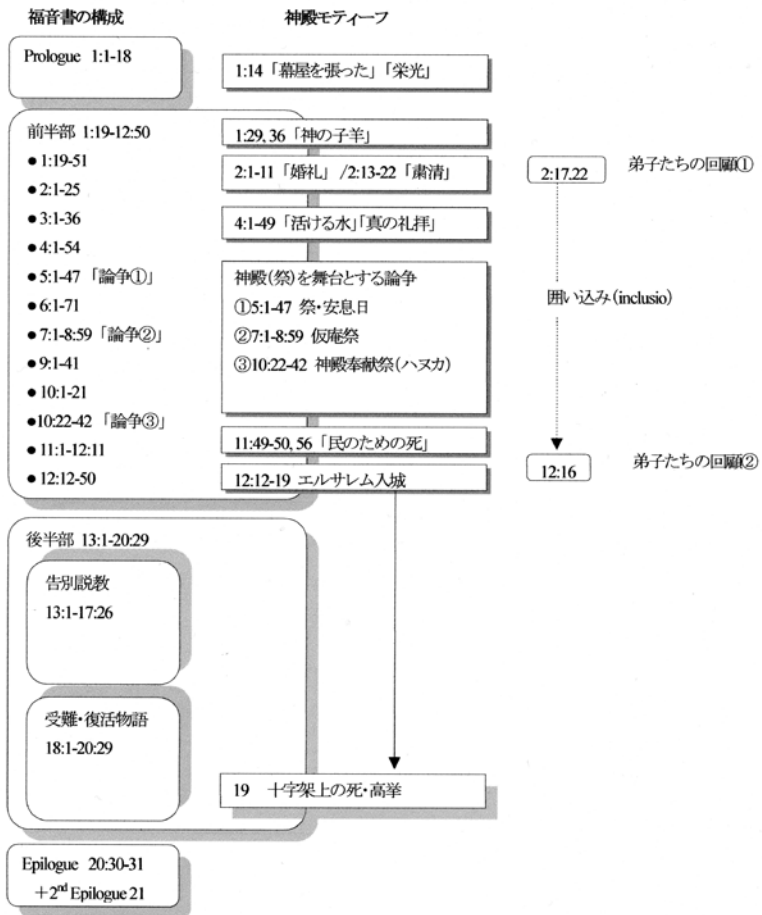
III. ヨハネ福音書の構成における神殿モチーフの位置づけ

これまで見てきたヨハネ福音書における神殿モチーフを、ヨハネ福音書全体の構成の中に位置づけ、このモチーフの内テクスト性（intratextuality）を図式化すると次のようになる（次頁の図参照）。

IV. まとめと展開

ヨハネ福音書において神殿モチーフはキリスト論的なモチーフとして機能し、福音書前半部に配置され、エゼキエル書およびゼカリヤ書などを主要な背景として「終末における新しい神殿」のイメージを提示している。原始キリスト教団において「（人間の）手で作られない神殿」は定型句となっていたようであるが（マコ 14:58; ヘブ 9:11）、ヨハネ福音書もひとつの独特な神殿モチーフを提示している⁹²⁾。

神殿モチーフそのものの意味は、ヨハネ福音書特有の多層的・多重的なものであり、決してシンプルなイメージとしては示されていない⁹³⁾。これら



は総合的に、イエスの復活の身体には、エルサレム神殿が有していた祭儀的機能がすべて網羅され、かつそれらを凌駕しているというキリスト論的主張・神学的主張となっているのである。そのうち、下記の四つが浮き彫りにされた。

1) イエス = 「新しい神殿」。(背景となっているのはエゼキエル書 47 章、

ゼカリヤ書 14 章。) そこにおいて、神の栄光が顕れ、また真の礼拝が行われる。つまり、栄光の「啓示」(Revelation) に強調点のある神殿のモチーフである。ヨハ 1:14; 2:1-11; 4:1-11; 7:37-39; 10:34-36; 12:12-19。

2) イエス＝「献げられる犠牲」。(背景となっているのはイザヤ書 53 章「僕の歌」、出エジプト記「過越の羊」、レビ記等。) こちらはむしろ、「世の罪を取り除く」という「贖罪」(Redemption/Atonement) に強調点がある神殿モチーフである。ヨハ 2:29,36; 2:13-22; 11:49-50, 56; 19:14, 29, 36; 12:12-19。ただし、ヨハネ福音書における「贖罪思想」は、原始エルサレム教会以来の伝統的な贖罪の用語を使用し、前提としながらも、既にモーセ律法を基準とはせず「脱儀礼化」しており、ヨハネ独自の神学の中でキリスト論的に機能している⁹⁴⁾。

3) イエス＝「新しい祭壇」。ユダヤ人たちとの論争の中でイエスのメシア性が争点となっていたが、神殿奉献祭における論争では、明らかにイエスは、父が聖別してこの世に遣わした者であり、新しい「真の神殿」そして「新しい祭壇」である。ヨハ 7:1-8:59; 10:22-42。

4) 「父の家」(2:16; 8:35; 14:2) における「神の子」らの一体性。最終的にイエスを信じる人々が「留まる」(μένω) 場。(しかし、いわゆる空間的な「場」として理解されているのではなく、働きにおける一体性。ヨハ 14:23 参照。) 告別説教を中心に出てくる神殿(家)モチーフは、福音書前半に表現されている神殿モチーフのように、単純に復活のイエスの身体＝神殿とすることができないように見えるが、「父の家」も家族的なメタファーを用いたひとつの神殿モチーフの変奏と見做すことができよう。その場合、焦点はむしろ、キリスト論ではなく、イエスと信じる者たちが「神の子」として父の家に「留まる」という機能を意味しているように思われる。いずれにしても、この点については、議論を深めることができなかったので、今後の課題としたい。

福音書の前半に登場する上記の神殿モチーフは、最終的に 19 章の十字架の場面の中に集約され、織り込まれている。それはつまり、イエスの十字

架上での死において、この世に遣わされた人の子イエスの使命が「成就し」「完成する」からである。

神殿モチーフを追うと、贖罪思想のテーマが全面に出るような印象を受け、実際、ブルトマン以来、極端に「啓示」をヨハネ福音書の神学的主張の中心としてきた解釈に対して、この神殿モチーフをひとつの根拠に異論を唱える向きもあることは説明した⁹⁵⁾。しかし、このモチーフは上記の「啓示」に比べるとやはり後景に留まるであろう。上記の1)の通り、神殿モチーフの多くが「啓示」を強調しており、イエスの世への派遣の使命は、確かに十字架上の死へと収斂されるが、ヨハネ福音書においては、その死は同時に父のもと（天）への高举であり、真のイスラエルの王（神）の即位の栄光でもある（ゼカリヤ書）。従って、神殿モチーフに犠牲の死（「贖罪」）としての意味が確かに含蓄されていても、それはやはり「啓示」に対して二次的であり、後景に控えていると見ていいのではないか。

ヨハ2:17, 22 および 12:16 によって形成される「囲い込み」(*inclusio*)は、弟子たちが「想い起した」という（イエスの栄光からの）回顧的な視点をテキストにもたらし、テキストの解釈上重要な鍵となっている。挿入句はいずれも出来事を「イエスの栄光」（死・復活・高举）から読み取ることを読者に指示している。ヨハネ福音書に数々挿入されている回顧的な視点(2:21-22, 24-25; 6:6, 64, 71; 7:5, 39; 9:7; 11:13, 51; 12:6, 33; 20:9)は相互に関連づけて解釈されるべきであり（特に「栄光後に与えられる霊」との関連において Cf. 7:39; 14:26）、さらに前半部のイエスの活動（出来事）が、神殿モチーフと共に、「書かれていること」(2:17; 12:16)・「聖書」(2:22)を「想い起こす」という枠組みの中にはめ込まれていることは、背景とされる「聖書」との間テキスト性において、ヨハネ福音書が読まれることを意味しているのである。

注

- 1) ヨハネ福音書の「神殿」モチーフ／テーマ（もしくはそのキリスト論）を考察した著作として下記のものがある。Cf. Johannes Frühwald-König, *Tempel und Kult: Ein Beitrag zur Christologie des Johannesevangeliums* (BU, 27; Regensburg: Prustet, 1998); Johanna Rahner, “*Er aber sprach vom Tempel seines Leibes*”: *Jesus von Nazareth als Ort der Offenbarung Gottes im vierten Evangelium* (BBB, 117; Bodenheim: Philo, 1998); Mary L. Coloe, *God Dwell with Us: Temple Symbolism in the Fourth Gospel* (Collegeville, Minnesota: A Micheal Glazier Book/ The Liturgical Press, 2001); Alan R. Kerr, *The Temple of Jesus’ Body: The Temple Theme in the Gospel of John* (JSNTSup 220 Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002); Stephen T. Um, *The Theme of Temple Christology in John’s Gospel* (London: T&T Clark, 2003); Richard Bauckham, *The Testimony of the Beloved Disciples: Narrative, History, and Theology in the Gospel of John* (Grand Rapids, Michigan: Baker Academic, 2007). 他にも、ユダヤ教の暦や祭りとの関連で福音書を解釈したものとして、Gale A. Yee, *Jewish Feasts and the Gospel of John* (Wilmington, DE: Michael Glazier, 1989); Michael A. Daise, *Feasts in John: Jewish Festivals and Jesus’ ‘Hour’ in the Fourth Gospel* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2007).
- 2) 「間テキスト性(intertextuality)」および「内テキスト性(intratextuality)」については、次を参照のこと。Jean Zumstein, “Intratextuality and Intertextuality in the Gospel of John,” in *Anatomies of Narrative Criticism: The Past, Present, and Future of the Fourth Gospel as Literature*, ed. by Tom Thatcher and Stephen D. Moore (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2008): 121-135. 間テキスト性についてのツムシュタインの説明は次の通りである。“A literary work does not lead a solitary existence; it is always networked. Its reading always takes against the background of other writings and in dialogue with them. The Fourth Gospel is no exception to this rule. It is linked to three literary corpora: (1) it belongs to the collection of the four canonical Gospels; (2) it is part of a corpus that includes the three Johannine Epistles and, according to some testimony of the early church, the book of Revelation; (3) a meaningful reading of the Gospel of John is impossible apart from the Hebrew Bible. This interplay between various literary corpora displays the classical form of intertextuality” (p. 128). 本論文においては、(3) に焦点を置き、間テキスト性を考察する。一方、内テキスト性とは、“[T]he term *intratextuality* is used in the more narrow sense of an interplay within the work itself” (p. 122). Cf. Jean Zumstein, *Kreative Erinnerung. Relucture und Auslegung im Johannesevangelium*. 2nd edition,

ATANT 84 (Zürich: Theologischer Verlag Zürich, 2004).

- 3) 以下でのヨハネ福音書の日本語訳は、基本的に岩波訳に沿いつつ、筆者が一部変更した。Cf. 小林稔訳「ヨハネによる福音書」、『新約聖書』新約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、2004年。
- 4) Zumstein, “Intratextuality and Intertextuality in the Gospel of John,” 123-124. ツムシュタインは、ヨハネ序文を paratext として位置付けている。paratext としてのヨハネ序文については、次を参照のこと。Cf. Zumstein, *Kreative Erinnerung*, 15-30 (“Der Prozess der Relecture in der johanneischen Literatur”), 105-126 (“Der Prolog, Schwelle zum vierten Evangelium”).
- 5) 「彼らに（おいて）宿るために」（ἐπικληθῆναι αὐτοῖς）。
- 6) 「わたしのために聖なるところ（ἀγίασμα）を造らせなさい。」// 「わたしは彼らのうちで見られるであろう（ὀφθῆσομαι ἐν ὑμῖν）。
- 7) 神殿に満ちる主の栄光。出 25:8; 40:35 「主の栄光が幕屋に満ちていた…（δόξης κυρίου ἐπλήσθη ἡ σκηνή）」；出 33:22 「わが栄光が通り過ぎるとき（ἡνίκα δ’ ἂν παρέλθῃ μου ἡ δόξα）」；出 40:34-38 「主の栄光が幕屋に満ちた（v.34, δόξης κυρίου ἐπλήσθη ἡ σκηνή）」；王上 8:11 「主の栄光が主の神殿に満ちたからである（ὅτι ἔπλησεν δόξα κυρίου τὸν οἶκον）」；エゼ 43:5; 44:4 「主の栄光が主の神殿を満たしていた（πλήρης δόξης κυρίου ὁ οἶκος）」。
- 8) ゼカ 2:14, 15 「わたしはあなたの只中に住まう」（κατασκηνώσω ἐν μέσῳ σου）「かの日には」（ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ）。エゼ 27:28 「永遠に彼らの真ん中に聖所を置く」（θήσω τὰ ἅγια μου ἐν μέσῳ αὐτῶν εἰς τὸν αἰῶνα）。
- 9) 拙論「ユダヤ教知恵文学における『人格化された知恵』の系譜—ヨハネ福音書序文、ロゴス概念の背景として—」『聖書学論集』39、日本聖書学研究所、2007年、107-151頁。
- 10) シラ 24:8-10 「わたしを造られた方は、わたしが憩う幕屋（τὴν σκηνὴν μου）を立てて、仰せになった。…聖なる幕屋の中で（ἐν σκηνῇ ἁγίᾳ）わたしは主に仕え、…」。
- 11) ヨハネ福音書における「罪」（ἁμαρτία）とは、ユダヤ教の律法（トーラー）違反を犯すことではなく、イエスの啓示を信じないこと、イエスを受け入れないこと、それによって神に背を向けることである（単数形で示されることが多い）：ヨハ 1:29; 8:21, 24, 34, 46; 9:34, 41; 15:22, 24; 16:8; 19:11; 20:23。これに対して、複数形で「罪々」という場合は、律法違反の個別行為を指すものとして使われる：ヨハ 9:34 「お前はまったく罪のうちに生まれたのに、われわれに教えようと言うのか」というファリサイ派の発言における「罪々」。Cf. ヨハ 8:24。この点、ある程度、パウロ書簡に認められるような「罪」という語句に関する使い分けが見られるとも言えよう。また、事例は少ないが、動詞として「罪を犯す」（ἁμαρτάνειν）：ヨハ 5:14;

(8:11); 9: 2, 3.最後の用例は、共観福音書およびヨハネ福音書のいずれにおいても、あまり頻繁には使用されない。しかし、ヨハネの第一の手紙においては頻出する。Cf. 1 ヨハ 1:10; 2:1; 3:6, 8, 9; 5: 16, 18.

- 12) ヨハネ福音書における「世」(κόσμος)の用法には、次の三種類が区別される。(1) 罪が支配する闇としての「世」(否定的な意味): ヨハ 7:7; 8:23; 12:25, 31; 14:17, 19, 22, 27, 30, 31; 15:18-19; 16:8, 11, 20, 28, 33; 17:6, 9, 11, 13-16, 18 (この用法での「世」はパウロの用法によく似ている。)、(2) 啓示の場としての「世」(肯定的な意味): ヨハ 1:29; 3:16, 17; 4:42; 6:14, 51; 7:4; 8:12; 9:5, 39、そして(3) 人間の世界としての「世」(中立的な意味): ヨハ 11:9; 17:5, 21, 23; (21:25)。
- 13) Raymond E. Brown, *The Gospel according to John I-XII*, AB (Ney York: Doubleday, 1960): 58-63; George Beasley-Murray, *John*, [second edition] WBC 36 (Nashville: Thomas Nelson, 1999): 24-25; Craig S. Keener, *The Gospel of John: A Commentary*, 2 vols. (Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, 2003): I 452-454; Francis J. Moloney, *Belief in the World: Reading John 1-4* (Eugene, Oregon: Wipf&Stock Publishers, 1993): 63-67; Rudolf Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, 4 vols. (New York: Crossroad Book, 1980): I-297-301.
- 14) 東方教会の教父たちが好んだ解釈。イザヤ書における「主の僕の歌」第一歌(イザ 42:1-4)と第四歌(イザ 52:13-53:12)を混合する解釈。Cf. 使 8:32 (イザ 53:7 引用)。Brown, *The Gospel according to John*, I 60.
- 15) Brown, *The Gospel according to John*, I 55-56, 60-61; Beasley-Murray, *John*, 25; C.K. Barrett, *The Gospel according to St. John* [second edition] (London: SPCK, 1978): 176; C.H. Dodd, *Interpretation of the Fourth Gospel* (London/New York: Cambridge University Press, 1998 [1953]): 230-238; idem, *Historical Tradition of the Fourth Gospel* (London/New York: Cambridge University Press, 1976): 269-270; Edwyn Hoskyns, *The Fourth Gospel* (London: Faber and Faber Limited, 1947): 176; C.F. Burney, *The Aramaic Origin of the Fourth Gospel* (Oxford: Clarendon Press, 1922): 104-108; Joachim Jeremias, ἀμνός, *TDNT*, I 338-340; R.H. Strachen, *The Fourth Gospel: Its Significance and Environment* [third edition] (London: Student Christian Movement Press LTD, 1951): 111-112; Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, I 300; Keener, *The Gospel of John*, I 452-454; George L. Carey, "The Lamb of God and Atonement Theories," *Tyndale Bulletin* 32 (1981): 97-122.
- 16) 西方教会の教父たちが好んだ解釈。Cf. Brown, *The Gospel according to John*, I 61.
- 17) 出 12:13ff 「あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。(λήμψεσθε δὲ δεσμὴν ὑσώπου καὶ βάψαντες ἀπὸ τοῦ αἵματος τοῦ παρὰ τὴν θύραν καθίξετε τῆς φλιαῖς καὶ

- ἐπ' ἀμφοτέρων τῶν σταθμῶν ἀπὸ τοῦ αἵματος) …」 Cf. v.23 「主が…塗られた血をご覧になって、その入り口を過ぎ越される (...καὶ ὄψεται τὸ αἷμα..., καὶ παρελεύσεται κύριος τὴν θύραν)」。
- 18) ヨハ 19:29 「そこには、酸い葡萄酒を満した器が置いてあった。人々は、この葡萄酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した (σκεῦος ἔκειτο ὄξους μεστόν· σπόγγον οὖν μεστόν τοῦ ὄξους ὑσσώπω περιθέντες προσήνεγκαν αὐτοῦ τῷ στόματι)」。
- 19) 「ヒソプ」(マヨナラ・シリアカ *Majonara syriaca*, シソ科) は、ユダヤ教の清めの儀式のために用いられる。Cf. レビ 14; 民 19; 詩 51:9 「ヒソプの枝で身を清めてください (LXX 50:9, ῥαντιεῖς με ὑσσώπῳ, καὶ καθαρισθήσομαι)」。
- 20) ヨハ 19:36 「その骨が打ち碎かれることはないであろう、という聖書が満たされるためだったのである (ἐγένετο γὰρ ταῦτα ἵνα ἡ γραφή πληρωθῇ, Ὅστούν οὐ συντριβήσεται αὐτοῦ。))」。
- 21) Cf. I コリ 5:7 「キリストが、わたしたちの過越の子羊として屠られたからです。καὶ γὰρ τὸ πάσχα ἡμῶν ἐτύθη Χριστός...パン種の入っていない純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。// マコ 14:12 も参照。// I ペト 1:18-19 「あなたがたが…贖われたのは、…傷やけがれののない子羊のようなキリストの尊い血によるのです (ἐλυτρώθητε ...ἀλλὰ τιμίῳ αἵματι ὡς ἀμνοῦ ἀμόμου καὶ ἀπίλου Χριστοῦ。))」。さらに、I ヨハでは、この方向の理解に進んでいる。I ヨハ 4:10 「わたしたちの罪を償ういけにえとして… (ἴλασμόν περὶ τῶν ἁμαρτιῶν ἡμῶν)」。
- 22) レビ 4:1ff. 「贖罪の献げもの」としての若い雄牛。レビ 16:20-22 (贖罪日、ヨム・キップール) 「雄山羊は彼らのすべての罪責を背負って無人の地に行く。雄山羊は荒野に追いやられる。」
- 23) C.H. Dodd, *The Interpretation of the Fourth Gospel*, 230-238; C.K. Barrett, “The Lamb of God,” *NTS* 1 (1954-1955): 210-218.
- 24) R. プルトマン 『ヨハネの福音書』 杉原助訳、日本キリスト教団出版局、2005年、629頁。Brown, *The Gospel according to John I-XII*, 58-59; Keener, *The Gospel of John*, I-452-453.
- 25) George L. Carey, “The Lamb of God and Atonement Theories,” *Tyndale Bulletin* 32 (1981): 101-107.
- 26) Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, I-332. Cf. Hermann L. Strack and Paul Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch* (München: C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 2009 [1924]): II: 406ff.
- 27) エルサレム神殿を中心とした聖性問題については、次を参照のこと。Cf. Philip Peter Jenson, *Graded Holiness: A Key to the Priestly Conception of the World* (JSNT-Sup 106; Sheffield; Sheffield Academic Press, 1992).

- 28) Brown, *The Gospel according to John*, I 97-98; Keener, *The Gospel of John*, I 499.
- 29) S. サフライ「家庭と家族」長窪専三訳、『総説・ユダヤ人の歴史 中—キリスト教成立時代のユダヤ人生活の諸相—』所収、S. サフライ、M. シュテルン編、長窪専三・土戸清・川島貞雄訳、新地書房、1991年、389頁。
- 30) Brown, *The Gospel according to John*, I 98; S. サフライ「家庭と家族」、391-392頁。
- 31) 事実、神殿モチーフを取り扱っている研究者は、この箇所を含めていない。
- 32) Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, I:344.
- 33) Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, I:344-345.
- 34) ただし、LXXでは「商人」(כַּנְעָנִי)を「カナン人」(Χαναναῖος)と訳出している。ヘブライ語(כַּנְעָנִי)では、①商人(tradesman) Cf. イザ 23:8、と②カナン人(Canaanite, Cf. Gen 12:6)の両方の意味が可能である。
- 35) Andreas Köstenberger, “The Destruction of the Second Temple and the Composition of the Fourth Gospel,” *TRINJ* 26 (2005): 205-242; idem, “The Destruction of the Second Temple and the Composition of the Fourth Gospel,” in *Challenging Perspectives on the Fourth Gospel*, ed. by John Lierman (WUNT 219; Tübingen; Mohr Siebeck, 2006): 69-108. Köstenberger は第二神殿の崩壊という歴史的事実とそのトラウマが実際に、ヨハネ福音書の神殿モチーフの背景となっていると提唱している。
- 36) Zumstein, “Intratextuality and Intertextuality in the Gospel of John,” 131.
- 37) Brown, *The Gospel according to John*, I CXL, 95, 194-195; Moloney, “From Cana to Cana (John 2:1-4:54) and the Fourth Evangelist’s Concept of Correct (and Incorrect) Faith,” *Studia Biblica 1978 II: Papers on the Gospels: Sixth International Congress on Biblical Studies, Oxford 3-7 April 1978*, ed., by E. A. Livingstone, 185-213.
- 38) Moloney, *Belief in the World*, 187-188.
- 39) Ernst Haenchen, *John 1: A Commentary on the Gospel of John Chapters 1-6*, trans. by Robert W. Funk (Philadelphia: Fortress Press, 1984): 159.
- 40) Brown, *The Gospel according to John*, I-169. Cf. ヨハ 19:14「それは過越祭の準備の日で、時刻は第六刻頃(正午頃)だった。」(ἦν δὲ παρασκευὴ τοῦ πάσχα, ὅρα ἦν ὡς ἕκτη.) ただし、ここでの時刻の数え方について異論もある。ヨハネ福音書が、日中の12時間を6:00(am)から第一刻、第二刻…と数え、夜を18:00から数えるシステムを採用している場合、第六刻は正午となる。しかし、ローマ式(エジプト式)では、日中は12:00から、夜は24:00から数えるため、第六刻は「朝の6時」(Belsler, Westcott, Walker)、もしくは「夕方の6時」である(R.A.Culpepper)と主張する研究者もいる。ただし、後者を支持する研究者は少ない。Cf. Roger T. Beckwith, *Calendar and Chronology, Jewish and Christian: Biblical, Intert-*

estamental and Patristic Studies (Boston, Leiden: Brill Academic Publishing, Ins., 2001).

- 41) Frédéric Mann, *Le symbole Eau-Esprit dans le Judaïsme Ancient*, Studium Biblicum Franciscanum Analecta 19 (Jerusalem: Franciscan Printing Press, 1983).
- 42) イザ 12:3 「救いの泉から水を汲む」(ἀντλήσετε ὕδωρ ... ἐκ τῶν πηγῶν τοῦ σωτηρίου) ; 55:1; エレ 2:13 「生命の水の源であるわたしを捨て…」(ἐμὲ ἐγκατέλιπον, πηγὴν ὕδατος ζωῆς) ; 17:13// エゼ 47:1-2 「水が神殿の敷居から湧き上がって…」(ὕδωρ ἐξεπορεύετο ὑποκάτωθεν τοῦ αἰθρίου)。
- 43) Cf. ゼカ 14:8 「その日、エルサレムから生命の水が湧き出で」(ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ ἐξελεύσεται ὕδωρ ζῶν ἐξ Ἱερουσαλὴμ) エゼ 47 「生命の水」 // 黙 22:1 「生命の水の川を私に見せた」(ἔδειξέν μοι ποταμὸν ὕδατος ζωῆς) ; 7:17 「生命の水の泉へ導き…」。
- 44) Keener, I-604 Cf. ヨセフとアセネト 14:12 「頭から灰を払い落しなさい。活ける水で顔を洗いなさい。」(日本語訳は、小河陽訳、「ヨセフとアセネト」、『聖書外典偽典 別巻』補遺 I、日本聖書学研究所編、教文館、2001 年 [第 5 版]、291 頁)。
- 45) Cf. ゼカ 13:1 「その日、ダビデのためエルサレムのために、罪のため穢れのために、開かれた泉があるだろう」(MT, 私訳。翻訳に際して上村静氏の助言を得た。) LXX では、「すべての場所がダビデ家とエルサレムの住民に開かれる」(マコール [泉] をマコーム [場所] と読んでいる) ; イザ 44:3 「わたしは渇いている地に水を注ぎ、…あなたの子孫に霊を注ぎ」ここでは、水と霊が並行している。エゼ 36:25-27 「わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。…わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。」(ῥανῶ ἐφ' ὑμᾶς ὕδωρ καθαρὸν, καὶ καθαρισθήσεσθε ... δώσω ὑμῖν καρδίαν καινὴν καὶ πνεῦμα καινὸν δώσω ἐν ὑμῖν)。
- 46) Cf. I エノ 48:1 「その所に、汲めどもつきせぬ義の泉をわたしは見た。また、そのまわりに知恵の泉がいくつもあって、渇ける者はみなそこで飲み、知恵に満たされ、義人たち、聖者たち、選ばれた者たちと住居をともにしていた。」 ; I エノ 49:1 「知恵は水のように注ぎ出され…」(霊との関連) ; 箴 13:14; 18:4; シラ 24:21, 24-27。
- 47) Keener, *The Gospel of John*, I-730.
- 48) ἀληθινός (真理の) : ヨハ 1:9 「真の光」 ; 4:23, 37; 6:32 「真のパン」 ; 7:28 「わたしを遣わした方は真実である」 ; 8:16 「わたしの裁きは真実である」 ; 15:1 「わたしは真のぶどうの木」 ; 17:3 「唯一の真の神」 ; 19:35 「その証は真実である」. また他に、イエスは「真理を語る」(τὴν ἀλήθειαν λέγω) ヨハ 8:40, 45, 46; 16:7; イエスは「道、真理、生命」ヨハ 14:6; 聖霊は「真理の霊」(τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας) ヨハ 14:17; 15:26; 16:13; 「真理において聖別する」(ἀγιάζειν ἐν ἀληθείᾳ) ヨハ 17:17, 19。

- 49) Beasley-Murray, *John*, 60.
- 50) ヨハ 18:20 「わたしはいつも、ユダヤ人が集まる会堂や神殿の境内で教えた。」
- 51) 仮庵祭の間のエピソードは 8:59 までであるが、10:21 までは仮庵祭の影響もしくはその関連でエピソードや論争が続いていると考えることができる (Brown, Schnackenburg, Keener)。確かに、9 章の盲人治癒のエピソードでも「シロアムの池」が登場し、この池の仮庵祭における意味を考慮すると、10:21 までの記述は仮庵祭との関連で描かれていると想定することが可能である。
- 52) ヨハネ福音書におけるガリラヤ宣教の旅は、①ヨハ 1:43-2:11、② 4:1-54、③ 6:1-7:9 の 3 回記述されている。③については、舞台がエルサレム神殿ではないので、ここでの議論からは除いているが、「ユダヤ人の祭である過越祭が近づいていた」(6:4) とあるように、6 章のエピソードも祭との関連で描写されている。
- 53) ヨハ 7:1-8:59 は、いわゆる「神殿説教」(Temple Discourse) と呼ばれる。「神殿」(の境内) という語は、ヨハ 7:14, 28; (8:2); 8:20, 50 で使用されている。
- 54) ヨハ 7:2 では、仮庵祭は、*ἡ ἑορτή ... ἡ σκηνοπηγία* と記されている。
- 55) レビ 23:36 に記されているように、おそらく捕囚期以降、仮庵祭には 8 日目に「シュミニ・アツェレット」(8 日目の集会) が追加された。「八日目が追加された意味と経過はさだかではない」(吉見、前掲書、81 頁) が、II マカ 10:6 で仮庵祭を 8 日間の祭としてしているところから、イエスの時代には仮庵祭は 8 日間祝われていたと思われる。これによって、ディアスポラが「シュミニ・アツェレットの第二日」を必要とすることから、現在のように仮庵祭が 9 日間祝われる習慣が定着した。Cf. 吉見、『ユダヤ人の祭りと通過儀礼』、81-82 頁。George W. MacRae, “The Meaning and Evolution of the Feast of Tabernacles,” *CBQ* 22 (1960): 251-276; Strack and Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, 2:774-81; Yee, *Jewish Festivals and the Gospel of John*, 72-74; Molony, *Signs and Shadow: Reading John 5-12*, (Eugene, Oregon: Wipf&Stock, 2004): 66; Beasley-Murray, *John*, 106; Keener, *The Gospel of John*, I-722; “After the Day of Atonement (10 Tishrei), this feast is celebrated for seven days, and on the eighth day, Water Ceremony is carried out (Cf. Lev 23:36).” 吉見崇一『ユダヤの祭りと通過儀礼』リトン、1994 年、72-84 頁。
- 56) MacRae, “The Meaning and Evolution of the Feast of Tabernacles,” 265.
- 57) ミシュナ第二編「モエード」第六部「スッカー」*Sukka* 4:9ff.
- 58) ヨハ 9:11 において、盲人の目に泥を塗り、シロアムの池で洗うように命じるイエスの言葉も、やはりこの仮庵祭との関連で読むべきかもしれない。
- 59) この仮庵祭の儀礼と 2 章 1-11 の水をワインに変化させるイエスの最初の「しるし」との関連を読みとることもできよう。
- 60) この川の水が誰の「腹」から流れ出るかについて、「彼の」(αὐτοῦ, 7:38) を「イ

エスを信じる者」と解釈する研究者 (Fee, Blenkinsopp, Hodges, Bernard, Augustine in Tr. Er. Jo 32.2.2, Luther in 8th Sermon on John 7) と「イエス自身」と取る研究者 (Dodd, Brown, Schnackenburg, Beasley-Murray, Keener, Dunn, Menken, et al.) とに分かれている。Cf. Gordon D. Fee, “Once More—John 7³⁷⁻³⁹,” *ExpT* 89 (1978): 116-118.

- 61) 「大声で言われた」(ἐκραξεν λέγων):「叫ぶ」(κράζω) はヨハネ福音書において、4回使用され (1:15 [洗礼者ヨハネ]; 7:28, 37; 12:44)、イエスを主語とするものは、そのうち3回である (7:28, 37; 12:44)。
- 62) 「その日、エルサレムから生命の水が湧き出で、半分は東の海へ、半分は西の海へ向かい、夏の冬も流れ続ける。主は地上をすべて治める王となられる。その日には、主は唯一の主となられ、その御名は唯一の御名となられる」(14:8-9)。また、16節「…残りの者が皆、年ごとに上って来て万軍の主なる王を礼拝し、仮庵祭を祝う」、21節「エルサレムとユダの鍋もすべて万軍の主に聖別されたものとなり、…その日には、万軍の主の神殿にもはや商人はいなくなる」。
- 63) Yee, *Jewish Festivals and the Gospel of John*, 73.
- 64) Keener, *The Gospel of John*, I 739; G.K. Beale and D.A. Carson, ed., *Commentary on the New Testament Use of the Old Testament* (Grand Rapids, Michigan: Baker Academic Press, 2007): 456-457.
- 65) ただし、この祭儀が既に紀元一世紀に祝われていたかどうかは確定不可能であるため、推測の域に留まるのだが、紀元70年以降には行われていたと主張する研究者もある。Cf. Beasley-Murray, *John*, 126-127.
- 66) アンティオコス IV (自称「神」、神殿に偶像を持ち込んだ) に対するユダ・マカバイの反乱、神殿の清め、真の神への神殿の奉献 (dedication)、犠牲の祭儀を復興したことを記念する祭 (I マカ 4:36-59)。アインティオコス I (セレウコスの息子) が自分を「神」として崇めさせたのが最初であるが、アンティオコス IV は、「Ἀντιόχου βασιλεύς」に加えて、さらに「θεοῦ Ἐπιφανοῦς」とコインに刻ませた。Adela Yarbro Collins and J.J. Collins, *King and Messiah as Son of God: Divine, Human, and Angelic Messianic Figures in Biblical and Related Literature*, (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2008): 52.
- 67) ἐγκαινίζειν, ἐγκαινισμός は、その意味内容から通常「奉献」(dedication) と訳出されているが、本来の意味は「新しくすること、更新、創始」(renewal/ inauguration) である。
- 68) Beale and Carson, *Commentary on the New Testament of the Old Testament*, 468.
- 69) Keener, *The Gospel of John*, II 855.
- 70) イエスに属する者たちは、「世」にありながら「上」に属する者として、イエスの業を引き継いでいく。

71) ただし、ヨハネ福音書の中では、この悪（罪）の起源やその具体的な現実についての考察はない。

72) ユダヤ教における「贖罪論」（贖い）の意味について確認したい。ヘブライ語聖書において「贖う」と意味する動詞はいくつかある。① **פָּדוּם**: ransom, redeem (出 21:8; Iサム 14:45; IIサム 7:23; イザ 1:27; レビ 19:20); redeem, deliver (王上 1:29) 動物・人間など生き物の法的自由が金銭の支払いによって取り戻されること。② **לָקַח**: buy back, redeem, buy freedom of person (レビ 25:33/25:48; ルツ 4:4, 6); redeem, ransom (出 6:6; 詩 23:11; イザ 43:1) 近親者の借金のかたを取り返す、奴隷の自由を買い戻す。神のイスラエルに対する救いの業を表現する語。「贖い主」(その場合、神はイスラエルの単なる解放者ではなく、イスラエルを買い戻す義務のある近親者として贖う)。③ **כִּפֶּר**: spread over, cover (創 6:14)。①・②が法律用語であるのに対し、③は宗教的・祭儀的用語。その意味での「(罪の) 贖い」を表現する。第一神殿時代～第二神殿時代(マカバイ戦争以前～167BCE)においては、「贖罪」(罪の贖い)は、神殿祭儀を中心とする③の祭儀的意味におけるものを指していた。そして、パレスチナにおける原始キリスト教団(Aramaic-speaking Jewish Christians)が前提とした「贖い」は、モーセ律法(トーラー)への違反の罪々〔複数〕を祭儀的儀礼によって「贖う」ことであった。(レビ 4:5, 16)これをイエスの十字架による死が、一回的に・普遍的に贖ったというのが基本理解となっている。この理解は、上記の③の理解とイザヤ書 53 章の「苦難の僕」が結びついたものである。原始エルサレム教会の罪理解および贖罪信仰については、次を参照のこと。大貫隆『イエスの時』岩波書店、2006年、129-151頁。

ヨハネ福音書における「贖罪」を考察する場合、この福音書における「罪」の概念がどのように想定されているかを考える必要がある(脚注 11を参照のこと)。複数形の「罪々」の使用回数が少ないことからヨハネ福音書においては、必ずしも律法違反の意味での「罪」が想定されているわけではないことは明らかであるが、それを否定しているわけでもなく、むしろ前提としていると考えることが自然であろう。

73) この点に関しての細かい議論はこの小論の範囲を超えるのでできないが、John Painter, Craig R. Koester, H.K. Nielsen, Moody Smith, Francis J. Molony, Jörg Frey, H. Kohler, T. Knöppler, J. Zumsteinなどを参照のこと。特に、Jörg Frey, H. Kohler, T. Knöpplerらが、ヨハネ福音書における贖罪論と「十字架の神学」(*Die theologia crucis*)を主張している。Cf. Jörg Frey, “*theologia crucifixi*” des Johannevangeliums, (2002); H. Kohler, *Kreuz und Menschenwerdung im Johannevangelium*, (1987); T. Knöppler, *Die theologia crucis des Johannevangeliums*, (1994); *The Death of Jesus in the Fourth Gospel*, ed. by G. van Belle, BETL 200 (Leuven: Leuven University Press, 2007). ヨハネ福音書の神学的主張として「啓示」

を強調し、イエスの十字架上の死は単独の出来事として何の救済的・贖罪論的意味を有しないとしたブルトマン（ブルトマン『ヨハネの福音書』、503頁）やケーゼマンの解釈に対して、上記の研究者らがイエスの死の意味を贖罪思想から再解釈している。ヨハネ福音書における「贖罪論」（atonement）に関わる箇所として、次の箇所が挙げられている。（これらは明らかに、この小論で取り扱っている「神殿モチーフ」の聖書箇所と重複している。）①ヨハ1:29, 36「神の子羊」、②ヨハ2:11ff. 復活のイエス身体＝「真の神殿」、③ヨハ4「真の礼拝」、④ヨハ10「真の羊飼い」「羊のためにいのちを捨てる良い羊飼い」、⑤ヨハ11:49-52「民のために死ぬ」、⑥ヨハ13、洗足式、⑦ヨハ15:13「友のためにいのちを捨てること」、⑧ヨハ3:14-15; 8:28; 12:34「人の子」句の箇所が挙げられている。⑧においては、「挙げられる」（*ὑψωθῆναι*）、「栄光」（*δόξα*）、「栄光をあらわす」（*δοξάζειν*）、「栄光を受ける」（*δοξασθῆναι*）などのキーワードが、十字架の出来事に収斂している。

- 74) 上村静『キリスト教信仰の成立—ユダヤ教からの分離とその諸問題—』fad 叢書 No.4、fad 叢書編集委員会、2005年、160頁。
- 75) Plato, *Alc.*, 1:115-127; *Greater Hippias*, 295A; Aristotle, *Rhet.*, 1.7.1, 1363b, et al. Cf. Keener, *The Gospel of John*, II 856, n. 189.
- 76) John A. Dennis, *Jesus' Death and the Gathering of True Israel; The Johannine Appropriation of Restoration Theology in the Light of John 11.47-52* (WUNT 217; Tübingen; Mohr Siebeck, 2006); Mark L. Appold, *The Oneness Motif in the Fourth Gospel* (WUNT 2/1; Tübingen; Mohr Siebeck, 1976).
- 77) 詩 118:25-26 「どうか主よ、わたしたちに救いを。…祝福あれ、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。」 ὦ κύριε, σῶσον δὴ, ... εὐλογημένος ὁ ἐρχόμενος ἐν ὀνόματι κυρίου· εὐλογήκαμεν ὑμᾶς ἐξ οἴκου κυρίου.// ゼファ 3:15 「イスラエルの王なる主はおまえの中におられる。」 (βασιλεὺς Ἰσραὴλ κύριος ἐν μέσῳ σου)。
- 78) ゼカ 9:9 「娘シオンよ、大いに踊れ。見よ、あなたの王が来る。ろばに乗って来る。」 Χαῖρε σφόδρα, θύγατερ Σιων... ἰδοὺ ὁ βασιλεὺς σου ἔρχεται σοι, ... καὶ ἐπιβηκῶς ἐπὶ ὑπόζυγιον καὶ πῶλον νέον.// ゼファ 3:14 「娘シオンよ、喜び叫べ。」 Χαῖρε σφόδρα, θύγατερ Σιων, κήρυσσε.// ゼカ 14:4, 5 「その日、主は御足をもってエルサレムの東にあるオリブ山の上に立たれる。わが神なる主は、聖なる御使いたちと共にあなたのもとに来られる。」
- 79) Dodd, *The Interpretation of the Fourth Gospel*, 229. 敵対者の言葉を逆手に取る典型的なヨハネ的手法。
- 80) 「なつめやし」は、第一次ユダヤ戦争の際に、反乱軍が発行していたコイン（69年）の図柄にもあり、戦後ローマは「なつめやし」をイスラエルの象徴としていた。その意味では、極めてナショナルスティックな色合いの強い植物でもあった。

- 81) 大貫隆『世の光イエス ヨハネによる福音書 福音書のイエス・キリスト 4』日本キリスト教団出版局、1996年、97-98頁。Cf. Petra von Gemünden, “Palmensymbolik in Joh 12, 13,” *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* 114 (1998): 39-70. ゲミュンデンは、ここでの「なつめやし」の使用を、イエスのエルサレム入城が実際には仮庵祭での出来事であった可能性を示唆するものとして提示している。
- 82) Larry W. Hurtado, “Remembering and Revelation,” in *Israel’s God and Rebecca’s Children: Christology and Community in Early Judaism and Christianity*, ed. by David B. Capes et al. (Waco, Texas: Baylor University Press, 2007): 195-213.
- 83) この敵対者がイエス逮捕時に使用する動詞「引き渡す」(παράδομαι) が、ここではイエスを主語として使用されることにより、イエスの主導性が強調されている。
- 84) Keener, *The Gospel of John*, II 1148-1149; Hoskyns, *The Fourth Gospel*, 532; Brown, *The Gospel according to John*, II 910, 931; Francis J. Moloney, *Glory not Dishonor: Reading John 13-21* (Eugene, Oregon: Wipf&Stock Publishers, 2004): 147-148.
- 85) 箴言・知恵の書などの「知恵」と「霊」との関連のイメージも想起されよう。
- 86) Keener, *The Gospel of John*, II 1147.
- 87) Brown, *The Gospel according to John*, II 929.
- 88) Cf. ヨハ 6:53-56 において、パンは明らかにイエスの肉と同定されているのであるが、「わたしの血を飲む」「わたしの血はまことの飲み物」(τὸ αἷμά μου ἀληθῆς ἐστὶν πόσις) などの表現において、ワインとイエスの血との関連性が示唆されていると言えよう。
- 89) Keener, *The Gospel of John*, II 1153; Hoskyns, *The Fourth Gospel*, 531.
- 90) 「出十二 46 の過越の羊の骨を折ってはいけないという規定が、七十人訳では命令の意の未来形で書かれている。著者はこれを過越の子羊と同一視したイエスについての預言とみなしているわけである。」(脚注三より引用)、『ヨハネによる福音書』小林稔訳、岩波書店、2007年、381頁。
- 91) ここでの背景をエゼキエル書の 46 章 16 節以下に見ることも可能である。
- 92) この他、新約文書の中には次のような神殿にまつわる理解があった。①神殿は(キリスト者による)「教会」(エフェ 2:19-21; I ペト 2:5; 4:17)、②「各キリスト者」が神殿 (I コリ 3:16; 6:19; II コリ 6:16)、パウロの書簡に見られる「キリストの身体」=教会および各キリスト者については、拙論「第1コリント書におけるパウロの身体(ソーマ)に関する一考察—全人格的存在およびキリスト者共同体のルート・メタファーとして—」、『カトリック女子教育研究』第13号、カトリック女子教育研究所、21-56頁、2006年、③真の神殿は「天上」にある (II パル 4:5; 黙 11:19; へブ 9:11-12)。
- 93) この点、モチーフをひとつの意味に限定する Mary Coloe (神の臨在の場)、

Richard Bauckham (新しい神殿〔祭壇〕の犠牲) に反して、ヨハネ福音書は「多重的・多層的」な神殿モチーフを提示していると筆者は見る。

94) Cf. 大貫、『イエスの時』、129-131 頁。

95) 脚注 72 および 73 を参照のこと。